

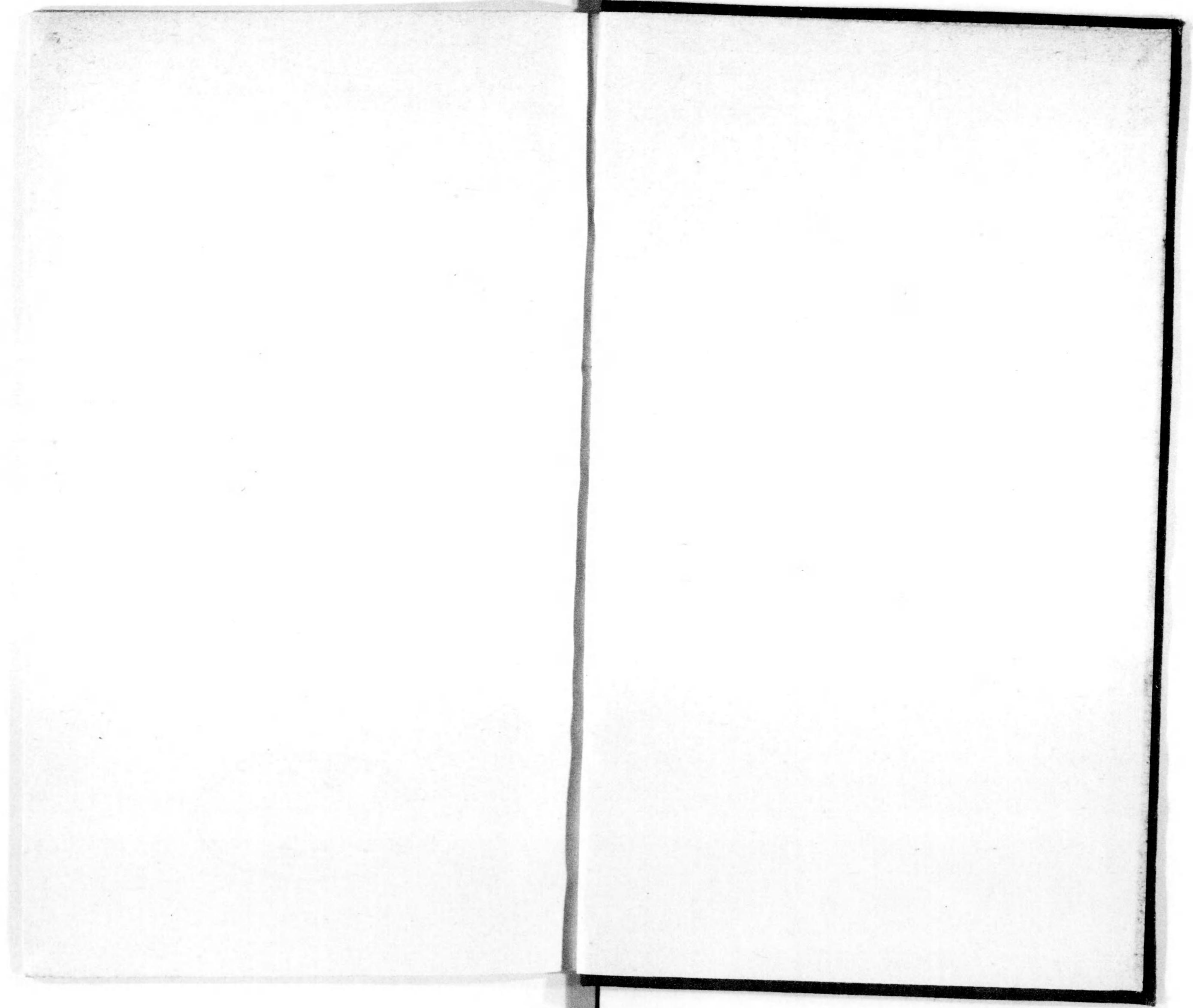
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





凌然草本文



持106
364



草

(本
文)

大正
13. 10. 9
内交

徒然草本文部目次

序	……	一頁	十四段	……	八頁
一段	……	一頁	十五段	……	九頁
二段	……	二頁	十六段	……	一〇頁
三段	……	三頁	十七段	……	一〇頁
四段	……	三頁	十八段	……	一〇頁
五段	……	三頁	十九段	……	一頁
六段	……	四頁	二十段	……	三頁
七段	……	四頁	二十一段	……	三頁
八段	……	五頁	二十二段	……	四頁
九段	……	五頁	二十三段	……	五頁
十段	……	六頁	二十四段	……	五頁
十一段	……	七頁	二十五段	……	六頁
十二段	……	七頁	二十六段	……	七頁
十三段	……	八頁	二十七段	……	七頁

二十八段	一八頁	四十四段	二七頁
二十九段	一八頁	四十五段	二六頁
三十段	一九頁	四十六段	二八頁
三十一段	二〇頁	四十七段	二八頁
三十二段	二〇頁	四十八段	二九頁
三十三段	二〇頁	四十九段	二九頁
三十四段	二一頁	五十段	三〇頁
三十五段	二一頁	五十一段	三一頁
三十六段	二一頁	五十二段	三一頁
三十七段	二二頁	五十三段	三一頁
三十八段	二三頁	五十四段	三一頁
三十九段	二三頁	五十五段	三二頁
四十段	二四頁	五十六段	三二頁
四十一段	二五頁	五十七段	三三頁
四十二段	二六頁	五十八段	三五頁
四十三段	二六頁	五十九段	三六頁

六十段	三七頁	七十六段	四七頁
六十一段	三六頁	七十七段	四七頁
六十二段	三九頁	七十八段	四七頁
六十三段	三九頁	七十九段	四八頁
六十四段	三九頁	八十段	四八頁
六十五段	四〇頁	八十一段	四九頁
六十六段	四〇頁	八十二段	四九頁
六十七段	四一頁	八十三段	五〇頁
六十八段	四二頁	八十四段	五一頁
六十九段	四三頁	八十五段	五一頁
七十段	四三頁	八十六段	五二頁
七十一段	四三頁	八十七段	五三頁
七十二段	四四頁	八十八段	五三頁
七十三段	四四頁	八十九段	五三頁
七十四段	四五頁	九十段	五四頁
七十五段	四六頁	九十一段	五五頁

九十二段	五頁	百八段	六頁
九十三段	六頁	百九段	六頁
九十四段	七頁	百十段	六頁
九十五段	七頁	百十一段	六頁
九十六段	六頁	百十二段	六頁
九十七段	六頁	百十三段	七頁
九十八段	六頁	百十四段	六頁
九十九段	五頁	百十五段	六頁
百一段	五頁	百十六段	六頁
百二段	六頁	百十七段	七頁
百三段	六頁	百十八段	七頁
百四段	六頁	百十九段	七頁
百五段	六頁	百二十段	七頁
百六段	六頁	百二十一	七頁
百七段	六頁	百二十二	七頁
			百二十三	七頁

百二十四段	七頁	百四十段	八頁
百二十五段	七頁	百四十一	八頁
百二十六段	七頁	百四十二	八頁
百二十七段	七頁	百四十三	八頁
百二十八段	七頁	百四十四	九頁
百二十九段	六頁	百四十五	九頁
百三十段	六頁	百四十六	九頁
百三十一段	七頁	百四十七	九頁
百三十二段	七頁	百四十八	九頁
百三十三段	七頁	百四十九	九頁
百三十四段	六頁	百五十	九頁
百三十五段	八頁	百五十一	九頁
百三十六段	八頁	百五十二	九頁
百三十七段	八頁	百五十三	九頁
百三十八段	八頁	百五十四	九頁
百三十九段	八頁	百五十五	九頁

百五十六段	九十五頁	百七十二段	一〇三頁
百五十七段	九十六頁	百七十三段	一〇三頁
百五十八段	九十六頁	百七十四段	一〇三頁
百五十九段	九十七頁	百七十五段	一〇四頁
百六十段	九十七頁	百七十六段	一〇七頁
百六十一段	九十七頁	百七十七段	一〇七頁
百六十二段	九十七頁	百七十八段	一〇八頁
百六十三段	九八頁	百七十九段	一〇八頁
百六十四段	九八頁	百八十段	一〇八頁
百六十五段	九八頁	百八十一段	一〇九頁
百六十六段	九九頁	百八十二段	一〇九頁
百六十七段	九九頁	百八十三段	一〇九頁
百六十八段	一〇〇頁	百八十四段	一一〇頁
百六十九段	一〇〇頁	百八十五段	一一〇頁
百七十段	一〇一頁	百八十六段	一一一頁
百七十一段	一〇一頁	百八十七段	一一一頁

百八十八段	一二三頁	二百四段	一三三頁
百八十九段	一二四頁	二百五段	一三三頁
百九十段	一二五頁	二百六段	一三三頁
百九十一段	一二六頁	二百七段	一三三頁
百九十二段	一二六頁	二百八段	一三三頁
百九十三段	一二六頁	二百九段	一三三頁
百九十四段	一二七頁	二百十段	一三三頁
百九十五段	一二八頁	二百十一段	一三四頁
百九十六段	一二八頁	二百十二段	一三四頁
百九十七段	一二九頁	二百十三段	一三四頁
百九十八段	一二九頁	二百十四段	一三五頁
百九十九段	一二九頁	二百十五段	一三五頁
二百段	一三〇頁	二百十六段	一三六頁
二百一段	一三〇頁	二百十七段	一三七頁
二百二段	一三一頁	二百十八段	一三八頁
二百三段	一三〇頁	二百十九段	一三八頁

二百二十段	三三頁	二百三十六段	三三頁
二百二十一	三〇頁	二百三十七段	三八頁
二百二十二	三三頁	二百三十八段	三八頁
二百二十三	三三頁	二百三十九段	三九頁
二百二十四	三三頁	二百四十段	四二頁
二百二十五	三三頁	二百四十一段	四二頁
二百二十六	三三頁	二百四十二段	四三頁
二百二十七	三三頁	二百四十三段	四四頁
二百二十八	三三頁		
二百二十九	三三頁		
二百三十	三三頁		
二百三十一	三四頁		
二百三十二	三五頁		
二百三十三	三五頁		
二百三十四	三六頁		
二百三十五	三六頁		

徒然草本文部目次 終

徒然草

序

つれづれなるまゝに、日くらし硯に對^ひびて心にうつりゆくよしなしごころを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

【第一段】

いでやこの世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。
 御門の御位はいとちかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやむごころなき。一の人の御有様は更なり、たゞうども舍人など賜るきは、ゆゑしと見ゆ。その子、孫までは、はふれにたれど猶ほなまめかし。それより下つかたは、程につけつゝ、時に遭ひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口惜し。法師ばかり、羨しからぬ者はあらじ。人には木のはしのやうに思はるゝよ」と、清少納言が書けるも、けにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじ

こは見えず、増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなかあらまほしき方もありなむ。

人は容ありさまの勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、ことば多からぬこそ、飽かず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性見えむこそ、口惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、移さば移らざらむ。かたち、心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くんだり、顔にくさけなる人にも、立ち交りて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事の方人の鏡ならむこそいみじかるべけれ。手など拙からずはしりがき、聲をかしくて拍子とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

【第二段】

いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せき様したる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ。『衣冠より馬車に至るまで、あるに従ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ』

こそ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、『公のたてまつりものは、おろそかを以てよしとす』こそ侍れ。

【第三段】

よろづにいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうざうしく、玉の盃のそこなき心ちぞすべき、露霜にしほたれて、所定めすまどひありき、親のいさめ、世の譏をつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるはひとりねがちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりきてひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

【第四段】

後の世のこと心に忘れず、佛の道うとからぬ、心にくし。

【第五段】

不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひ取りたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく、明し暮したる、さる方にあらまほし。顯基の中納言のいひけむ『配所の月、罪なくて見むこと』、さもおほえぬべし。

【第六段】

わが身のやむごとくならむにも、まして數ならざらむにも、子こいふ者なくてありなむ、前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えむ事を願ひ給へり。染殿の大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるは、わろきことなり」とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖徳太子の、御墓をかねて築かせ給ひける時も「こゝを切れ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

【第七段】

あだし野の露、消ゆる時なく、鳥部山の烟、立ち去らでのみ住みはつる習ならば、いかにものゝあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かけろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし、つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず惜しと思はじ、千年を過すとも、一夜の夢の心こそせめ。住みはてぬ世にみにくき姿を待ち得て何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそ、目やすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、容を恥づる心もなく、人に出て交はむことを思ひ、夕の日に

子孫を愛して、榮ゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深くものゝあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

【第八段】

世の人の心をまどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚なるものかな。にほひなどは假のものなるに、しばらく衣裳にたきものすと知りながら、えならぬにほひには必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の、もの洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけむは、まことに手足肌などの、清らに肥え、あぶらづきたらむは、外の色ならねば、さもあらむかし。

【第九段】

女は髪のためだからむこそ、人のめだつべかめれ、人のほど心ばへなどは、ものうちいひたるけはひにこそ、ものごしにも知らるれ。事にふれて、うちある様にも人の心をまどはし、すべて女のうちとけたる、いも寝ず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにも、よく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふが故なり。まことに愛著の道、その根深く、源遠し。六塵の樂欲多しこいへども、みな厭離

しつべし。その中にたゞかのまどひの、ひみつ止め難きのみぞ、老いたるも、若きも、智あるも、愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。
 されば女の髪筋をよれる綱には、大象もよく繋かれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ、いひ傳へ侍る。みづから戒めて、恐るべく慎むべきはこのまどひなり。

【第十段】

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人の、どやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど。木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。
 多くのたくみの、心を盡して磨き立て、からの、やまとの、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る眼も苦しく、いとわびし。さてもはやながらへ住むべき、また時の間の煙となりなむとぞ、うち見るより思はるゝ。大方は家居にこそ、ことざまは推し量らるれ。

後徳大寺のおとどの、寢殿に驚るさせじにて、繩を張られたりけるを、西行が見て『鳶の居たらむは、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ』とて、その後は参らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、『まことや烏の群れるて、池の蛙を捕りければ、御覽じ悲ませ給ひてなむ』と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にもいかなる故か侍りけむ。

【第十一段】

十月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ寛のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊、紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよこ、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

【第十二段】

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそ、うれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと向ひたらむは、ひとりある心ちやせむ。

互にいはむほどのことをば、けにと聞くかひあるものから、聊か違ふ所もあらむ人こそ、『われはさやは思ふ』など、争ひにくみ、『さるからさぞ』ともうち語らはゞ、つれづれ慰まめと思へど、けには少しかこつ方も、われと等しからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかな心の友には、遙に隔りたる所のありぬべきぞわびしきや。

【第十三段】

ひとり燈火の下に書をひろけて、見ぬ世の人を友にするこそ、こよなう慰むわざなれ。書は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、古のはあはれなること多かり。

【第十四段】

和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づれば

おもしろく、おそろしき猪も、臥す猪の床といへば、やさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふし、をかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうにいかによや。ことばの外に、あはれにけしき覺ゆるはなし。

貫之が『絲によるものならなく』といへるは、古今集の中の歌屑とかや、いひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えぬ。その世の歌には、すがたことば、このたぐひのみ多し。この歌に限りて、かくいひ立てられたるも知り難し。源氏物語には、『ものまはなし』とぞ書ける。新古今には、『残る松さへ峰にさびしき』といへる歌をぞいふなるは、まことに少しくだけたる姿にもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じ仰せ下されけるよし、家長が日記には書けり。

歌の道のみ古に變らぬなど、いふこともあれど、いさや、今もよみあへる同じことば、歌枕も、昔の人のよめるは、更に同じものにあらず。やすく、すなほにして、姿も清けに、あはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のこころこそ、又あはれなるこころは多かめれ。昔の人は、いかにいひ棄てたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

【第十五段】

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、目さむる心ちすれ。そのわたり、こゝか
しこ見ありき、田舎びたる所、山里などは、いと目馴れぬ事のみぞ多かる。都へ便
もとめて文ふみやる。『そのこと、かのこと、便宜びんぎに忘るな』などいひやるこそをかしか
れ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度てうどまで、よきはよ
く、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺、社やしろなどに、忍
びてこもりたるもをかし。

【第十六段】

神樂かぐらこそ、なまめかしくおもしろけれ、大方おほかたものゝ音ねには、笛、篳篥ひちりき。常に聞きた
きは、琵琶、和琴。

【第十七段】

山寺やまでらにかきこもりて、佛ほとけにつかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁にごりも清きよまる心
ちすれ。

【第十八段】

人はおのれをつまやかにし、おごりを退けて、財たからをもたず、世よを貪むさぼらざらむぞ、

いみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀まれなり。

もろこしに許由きよゆといひつる人は、更に身に隨したがへる貯たくはへもなく、水をも手して捧たげ
て飲みけるを見て、なりひさごといふものを。人の得させたりければ、ある時、木
の枝に懸かけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて棄すてつ、また手
にむすびてぞ、水も飲みける。いかばかり心の中うちすゞしかりけむ。孫そん農んは冬の月に
袞ふんなくて、わら一束ひとつかねありけるを、夕ゆふべにはこれに臥ふし、朝あしたには收とめけり。もろこしの
人は、これをいみじと思へばこそ、記しるしこめて世にも傳つたへけめ、これらの人は語
りも傳つたふべからず。

【第十九段】

折をふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。『ものゝあはれは秋こそまされ』
と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心も浮きたつものは、春
のけしきにこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かけに、
垣かきねの草くさ萌もえ出でづる頃より、やゝ春深く霞かすみみわたりて、花もやうやうけしきだつ程こ
そあれ、折しも雨風うち續つきて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉あおばになりゆくまで
よろづにたゞ心をのみぞなやます。花はな橘たちばなは名にこそ負おへれ、なほ梅のほひにぞ

古のことも立ちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清けに、藤のおほつかなきさましたる、すべて思ひ棄て難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしけに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人のこひしさもまされど、人の仰せられしこそ、けにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗となる頃、水鶏のたゞくなど、心ほそからぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊やり火ふすぶるもあはれなり。六月被^みまたをかし。

棚機祭^{たなはた}こそなまめかしけれ。やうやう夜寒^{よふさむ}になるほど、雁^{かり}鳴きて来る頃、萩の下葉色^{はぎいろ}つくほど、わさ田刈^{たが}り乾^ほなど、取り集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝^{あした}こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、同じこと、また今更にいはいはじにもあらず、おほしき事にいはいはぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀^{みぎは}の草に紅葉^{もみぢ}の散りこどもりて、霜いと白う置ける朝^{あした}、やり水より、煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もな

き月の、寒けくすめる二十日^{にじゅうにち}あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛^{おんぶつ}名荷前^{なにかさ}の使たつなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁^{しげ}く、春のいそぎに取り重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儼^{ついでん}より四方拜^{しやうぱい}につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半^{よはん}過ぐるまで人の門^{かど}たゞきはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉^{あかつき}方よりさすがに音^ねなくなりぬるこそ、年のなごりも心ほそけれ。なき人の来る夜とて、魂^{たま}祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日^{きのう}に變りたりとは見えねど、引きかへめづらしきこゝちぞする。大路^{おほぢ}のさま、松立てわたして、花やかにうれしけなるこそ、またあはれなれ。

【第二十段】

某^{なにがし}とかやいひし世捨人^{よすてびと}の、「この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しき」といひしこそ、まことにさも覚えぬべけれ。

【第二十一段】

よろづのことは、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、『月ばかりおもしろきものはあらず』といひしに、またひとり、『露こそあはれなれ』と争ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらむ。

月花は更なり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて、清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。『沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住ることしばらくもせず』といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。嵇康も山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしぶといへり。人遠く、水草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらず。

【第二十二段】

何事も、ふるき世のみぞしたはしき。今様は、むけにいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの作れる、うつくしき器物も、古代のすがたこそ、をかしと見ゆれ。文のこぼなどぞ、昔の反古どもはいみじき。

たゞいふことばも、口惜しうこそ、なりもてゆくなれ。古は、『車もたけよ』、『火かけよ』とこそいひしを、今様の人は、『もてあけよ』、『かきあけよ』といふ。主殿寮の、『人数たて』といふべきを、『たちあかしゝろくせよ』といひ、最勝講の御聴聞所

なるをば、『御講の廬』とこそいふを『講廬』といふ、口惜しとぞ、ふるき人は仰せられし。

【第二十三段】

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世つかずめでたきものなれ。

露臺、朝餉、何殿、何門などはいみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小薊、小板敷、高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ。陣に夜のまうけせよといふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、『かいともし、とうよ』などいふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまは更なり。諸司の下人どもの、したりがほに馴れたるもをか。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに眠り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり。こぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

【第二十四段】

齋宮の野の宮におはします有様こそ、やさしくもおもしろき事のかぎりとはおほえしか。『經』、『佛』など忘みて、『なかが』、『そめ紙』などいふなるもをか。

すべて神の社こそ、棄てがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣たまがきしわたして、榊かきに木綿ゆふかけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松の尾、梅の宮。

【第二十五段】

飛鳥川あすかがはの淵瀬ふちせ、常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行きかひて、花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は、人あらたまりぬ。桃李とうりものいはねば、誰と共にか昔を語らむ。まして見ぬ古のやむごとなかりけむあとのみぞ、いこはかなき。

京極殿きやうごくのどの、法成寺ほふじやうじなど見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿みどうのどのの造りみが、せ給ひて、庄園多く寄せられ、わが御族みむぢのみ、御門みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末ゆへすままでとおほし置きし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおほしてむや。大門だいもん、金堂こんどうなど近くまでありしかど、正和の頃、南門なんもんは焼けぬ。金堂はその後倒れ伏したるまゝにて、とり立つるわざもなし。無量壽院むりやうじゆゑんばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の佛九體ぼつこく、いと尊たふとくて並びおはします。行成大

納言なごんの額かみ、兼行かねゆきが書ける扉かた、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂ほふけだうなども未だ侍るめり。これも又いつまでかあらむ。かばかりのなごりだになき所々は、おのづから礎いしづまばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。さればよろづに、見ざらむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

【第二十六段】

風も吹きあへず、うつろふ人の心の、花になれにし年月を思へば、あはれと聞きしここのはごとくに忘れぬものから、わが世のほかになりゆくならひこそ、なき人の別よりもまさりて、悲しきものなれ。されば白き絲の染そまむことを悲び、道の卷ちまたの別れむことをなけく人もありけむかし。堀川院の百首の歌の中に、

昔見しいもがかきねはあれにけり、

つばなまじりのすみれのみして。

さびしきけしき、さること侍りけむ。

【第二十七段】

御國護みくにのりの節會行せちあひゆきはれて、劔聖けんせい、内侍所ないししやうわたし奉らるゝほどこそ、限なう心ほそけれ。

新院のおりるさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

殿守のとものみやつこよそにして、

はらはぬ庭に花ぞ散りしく。

今の世のことしげきにまぎれて、院には参る人もなきぞさびしけなる。かゝる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。

【第二十八段】

諒闇の年ばかり、あはれなることはあらず。倚廬の御所のさまなど、板敷をさけ、蘆の御簾をかけて、布の帽額あららしく、御調度どもおろそかに、みな人の装束、太刀、平緒まで、ことやうなるぞゆゑしき。

【第二十九段】

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞ、せむ方なき。人静りて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、残し置かじと思ふ反古などやり棄つる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折の心ちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむ

と思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心なくて變らず久しき、いとかなし。

【第三十段】

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしくせばき所に、あまたあひるて、後のわざども營みあへる、心あわたし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、互にいふ事もなく、われかしこけに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ、もとの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかじかの事は、あなかしこ、跡のため忌むことぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。

年月経てもつゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々にとしといへることなれば、さはいへど、そのきはどかりは覺えぬにや、よしなしごとなどいひて、うちも笑ひぬ。

からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく率都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、こゝろふすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらむ程こそあらめ、そも又ほどなく失せて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれこやおもふ。さるはあとふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ心あらむ人はあはれとも見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪に摧かれ、ふるき墳は動かれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。

【第三十一段】

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこ
と何ともいはざりし返事に、『この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが
ひがしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすがへす口惜しき御心
なり』といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも
忘れ難し。

【第三十二段】

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、
おほし出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しけきに、わざと

ならぬにほひ、しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いさものはれなり。
よきほどにて出で給ひぬれど、なほことさまの優に覺えて、ものゝかくれより、し
ばし見るたるに、妻戸をいますこし推しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこ
もらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らむ。かやう
のことは、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍
りし。

【第三十七段】

今の内裏造り出されて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、既に
遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御覽じて、『閑院殿の櫛形の穴は圓く、ふちもな
くてぞありし』と仰せられける、いみじかりけり。これは葉の入りて、木にてふち
をしたりければ、あやまりにて、直されにけり。

【第三十四段】

甲香は、ほらがひのやうなるが、小くて口のほどの細長にして、出でたる貝の蓋な
り。武藏の國金澤さいふ浦にありしを、所の者は、へなたりと申し侍るとぞいひし。

【第三十五段】

手のわろき人の、はばかりせず、文書きちらすはよし。見ぐるしとて、人に書かするはうるさし。

【第三十六段】

久しくおとづれぬ頃、いかばかり怨むらむと、わがおこたり思ひ知られて、ことばなき心ちするに、女の方より「仕丁やある、一人」などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

【第三十七段】

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、われに心おき、引きつくるへる様に見ゆるこそ、今更かくやはなど、いふ人もありぬべけれど、なほけにけにしく、よき人かなとぞおほゆる。うとき人の、うちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

【第三十八段】

名利につかはれて、靜なるいとまなく、一生を苦むるこそ愚なれ、財多ければ、身をまもるにまどし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後には、金をして北斗をさふとも、人の爲にぞわすらはるべき。愚かなる人の目を喜ばしむるたのしみ、又あじきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉のかざりも心あらむ人は、うたておろかなりこそ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚なる人なり。

埋れぬ名を永き世に残さむこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やむごみなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ、時にあへば高き位に上り、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人、聖人、みづから卑しき位にをり、時にはあはすして止みぬる、また多し。ひとへに高きつかさ、位を望むも、次に愚なり。智恵と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきを、つらつら思へば、また譽を愛するは、人の聞きを喜ぶなり。譽むる人、譏る人、共に世に止まらず、傳へ聞かむ人、またまた速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむこそを願はむ。譽はまた譏のもとなり。身の後の名残りて、更に益なし。これを願ふも、次に愚なり。但し強ひて智をもとめ、賢を願ふ人の爲にいはど、智恵出で、は偽あり、才智は

煩惱の増長せるなり。

傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へむ。これ徳をかくし、愚を守るにはあらず。もとより賢愚得失の境に居らざればなり。まよひの心をもちて名利をもちむるにかくのごとし。萬事みな非なり。いふに足らず、願ふに足らず。

【第三十九段】

ある人法然上人に「念佛の時、眠におかされて行をおこたり侍ること、いかゞしてこの障りをやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど念佛し給へ」と答へられける、いと尊かりけり。また「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これも尊し。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまた尊し。

【第四十段】

因幡國に何の入道とかいふものゝ女、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれど、この女たゞ粟をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらずとて、親許さとりけり。

【第四十一段】

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てゝ見えざりしかば、各下りて、埒のきはによりたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向なる樗の木に、法師上りて、木の股について、もの見るあり。取りつきながらいたう眠りて、落ちぬべき時に、目を覺すことたびたびなり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな、かく危き枝の上にて、やすき心ありて眠るらむよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來、たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て目を暮す。愚なることは、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさこそ候ひけれ。最も愚に候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへ入らせ給へ」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひがけぬ心ちして胸に當りけるにや。人木石にあらねば、時にとりてものに感ずることなき

にあらず。

【第四十二段】

唐橋の中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出で難かりければ、さまさまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目・眉・額なども腫れまどひて、うち覆ひければ、ものも見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなどして、後は坊の中の人にも見えず、籠り居て、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死にけり。かかる病もあることにこそ。

【第四十三段】

春のくれつ方、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の奥深く、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過し難きを、さし入りて見れば、南面の格子みな下してさびしけなるに、東に向きて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清けなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどや

かなる様して、机の上に文をくりひろげて見るたり。いかなる人なりけむ、尋ね聞かまほし。

【第四十四段】

あやし竹の編戸の中より、いさ若き男の、月影に色合さだかならねど、つややかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆるづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細道を、稻葉の露にそほちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたるあはれ聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かむ方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のある中に入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事など候ふにや」といふ。

御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風に誘はれくる空だきもの、にほひも、身にしむ心ちす。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追ひ風よういなど、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋れて、蟲の音かごとがましく、やり水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆきも早きことちして、月の晴れ曇ること定め難し。

【第四十五段】

公世の二位の兄に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の側に大きな榎のありければ、人榎の僧正とぞいひける。この名然るべからずとて、か木を伐られにけり。その根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよいよ腹だちて、切りくひを掘り棄てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、堀池の僧正とぞいひける。

【第四十六段】

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。たびたび強盜にあひたる故に、名をつげにけるとぞ。

【第四十七段】

ある人、清水へ参りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら、「くさめくさめ」といひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」といひけれども、いらへもせず、猶いひ止やまざりけるを、度々問はれて、うち腹だちて、「やゝ鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の、比叡の山にち

ごにておはしますが、たゞ今もや鼻ひたまはむと思へば、かく申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけむかし。

【第四十八段】

光親卿、院の最勝講奉行として候ひけるを、御前へ召されて、供御を出されて、食はせられけり。さて食ひちらしたる衝重を、御簾の中へ入れてまかり出でにけり。女房、「あなきたな、誰にとれとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やむごとなきことなり」と、かへすがへす感ぜさせたまひけるとぞ。

【第四十九段】

老い來りて、はじめて道を行ぜむと待つことなかれ。ふるき墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽にこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれることは知らるれ。あやまりこいふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて、過ぎにし事のくやしきなり。その時悔ゆるとも、かひあらむや。

人はたゞ無常の身に迫りぬる事を、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。

さらばなどか、この世の濁りも薄く、佛道をつとむる心もまめやかならざらむ。昔ありけるひじりは、人の來りて自他の要事をいふ時、答へていはく、『今、火急の事ありて、既に朝夕に迫れり』とて、耳をふたぎて念佛して、遂に往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒といひけるひじりは、あまりにこの世のかりそめなる事を思ひて、しづかについるけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

【第五十段】

應長の頃、伊勢の國より女の鬼になりたるを、ゐて上りたりといふ事ありて、その頃二十日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。『昨日は西園寺に参りたりし、今日は院へ参るべし、たゞ今はそこそこに』などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごとといふ人もなし。上下たゞ、鬼の事のみいひやまず。その頃、東山より安居院の邊へまかり侍りしに、四條より上さまの人、みな北を指して走る。一條室町に鬼ありとのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやくあとなき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、大方あへる者なし。暮るゝまで、かく立ち騒ぎて、はては鬨諍起りて、あさましき事どもありけり。その頃おしなべて二日三日人

のわづらふこと侍りしをぞ、かの鬼のそらごとは、このしるしを示すなりけりと、いふ人も侍りし。

【第五十一段】

龜山殿の御池に大井川の水をまかせられむとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出して、かけたりに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、遂にまはらで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて参らせたりけるが思ふやうにめぐりて、水を汲み入るゝ事、めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やむごとなきものなり。

【第五十二段】

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うくおほえて、ある時思ひ立ちて、たゞひとり、かちより詣でけり。極樂寺、高良など拜みて、かばかりこ心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、『年頃思ひつること果し侍りぬ、聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に、山へ登りしは、何事か

ありけむ。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

【第五十三段】

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとして、おのおの遊ぶことありけるに、酔ひて輿に入るあまり傍なる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座輿に入ること限なし。しばしかなで、後、ぬかむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかかはせむとまどひけり。とかくすれば頸のまはりかけて、血垂り、たゞ膨れに膨れみちて、息もつまりければ、うち破らむとすれど、たやすく破れず。響きて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪み見ることに限なし。醫師のもとにさし入りて、對ひるたりけむありさま、さこそ異様なりけめ。ものをいふも、くぐもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて、泣き悲めども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある

者のいふやう「たゞひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなとか生きざらむ。たゞ力を立て、引き給へ」とて、薬のしべを、まはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちきるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうけながら抜けにけり。からき命まうけて久しく病みるたりけり。

【第五十四段】

御室にいみじき兒のありけるを、いかでさそひ出して遊ばむとたくむ法師どもありて、能ある遊び法師どもなど語りて、風流の破籠のやうのもの、ねんごろに營み出でて箱風情のものにしたゝめ入れて、雙の岡の便よき所に埋み置きて、紅葉散しかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそそのかし出でにけり。うれしく思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の蓆に並みゐて「いたうこそこゝうじにたれ。あはれ紅葉を焼かむ人もがな。験あらむ僧たち、祈り試みられよ」などいひしろひて、埋みつる木の下に向きて、數珠おしすり、印ことごとしくむすび出でなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやつやものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山をあされども、なかりけり。埋みけるを、人の見置きて、御所へ参りたる間に、盗めるなりけり。法師どもここの

はなくて、聞きにくくいさかひ、腹だらて歸りにけり。あまりに興あらむとする事は、必ずあいなきものなり。

【第五十五段】

家の造り様は、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃、わろき住居は堪へ難きことなり。深き水は涼しけなし、浅くて流れたる、はるかに涼し。こまかきものを見るに、やり戸は蔭の間よりも明し、天井の高きは冬寒く、燈火くらし、造作は用なき所を造りたる、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

【第五十六段】

久しく隔りて逢ひたる人の、わが方にありつること、かすかすに残りなく、語りつゞくるこそあいなけれ。隔なく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは。次ぎまの人は、あからさまに立ち出でて、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興するぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出で

て、見ることのやうに語りなせば、みな同じく笑ひのよし、いとらうがはし。をかしき事をいひても、いたく興ぜぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、品のほどははかられぬべき。人の見さまのよしあし、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身を引きかけていひ出でたる、いとわびし。

【第五十七段】

人の語り出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。少しその道知らむ人は、いみじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

【第五十八段】

「道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人に交るとも、後世を願はむに難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。けにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でむと思はむに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みるいとなみのいさましからむ。心は縁に引かれて移るものなれば、しづかならでは道は行じがたし。

そのうつはもの、昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あらぬわざなれば、おのづから世を食るに似たることも、便にふればなどかなからむ。さればこて背けるかひなし。さばかりならば、なじかは棄てしなどいはむは、むけの事なり。さすがに一たび道に入りて、世を厭はむ人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさむ。求むる所はやすく、その心はやく足りぬべし。かたちに恥づる所もあれば、さはいへど、悪にはうとく、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらむしるしには、いかにもして世を遁れむ事こそ、あらまほしけれ。ひとへに貪る事をつこめて、菩提に赴かざらむは、よろづの畜類に隣る所あるまじくや。

【第五十九段】

大事を思ひ立たむ人は、さがりがたく、心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながら棄つべきなり。しばしこの事はて、同じくはかの事沙汰しておきて、しかじかの事、人の嘲やあらむ、行く末難なくしたためまうけて、年頃もあればこそあれ、その事待たむほどあらじ、ものさわがしからぬやうになど思はむには、えさらぬ事

のみ、いとど重りて、ここの盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきは、みなこのあらましにてぞ、一期は過ぐめる近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけむとすれば、恥をも顧みず財をも棄てて、逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは、無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に、逃れ難きものを、その時、老いたる親、いとみなき子、君の恩、人の情、棄て難しとて棄てざらむや。

【第六十段】

眞乘院に盛親僧都とて、やむごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物を好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝もとに置きつゝ食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など、療治とて籠りて、思ふやうに、よきいもがしらを撰びて、ここに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はすることなし。たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊一つとを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を、いもがしらのあしと定めて、京なる人に預けおきて、十貫づつ取り寄せて、いもがしらを乏しがらずめしけるほどに、又ことように用ゐることな

くて、そのあし皆になりけり。三百貫のものを貧しき身にまうけて、かくはからひける、まことにあり難き道心者なりとぞ、人申しける。

この僧都、或法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。『とは何ものぞ』と人の問ひければ、『さる物をわれも知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ』とぞいひける。この僧都みめよく、力強く、大食にて、能書、學匠、辯説、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたるくせものにて、よろづ自由にして、大かた人に従ふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、みな人の前すゑわたすを待たず、わが前に据ゑぬれば、やがて一人うちくひて、歸りたければ、一人つい立ちて行きけり。時、非時も人に等しく定めて食はず、わが食ひたき時、夜中にも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけ籠もりて、いかなる大事あれども、人のいふことを聞き入れず。目覺めぬれば、いく夜も寝ず、心すましてうそぶきありきなど、世の常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづ許されけり。徳の至りけるにや。

【第六十一段】

御産の時、飢落すことは、定れることにはあらず。御胞衣とどこほる時のまじなひ

なり。とどこほらせ給はねばこの事なし。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の飢をめすなり。ふるき寶藏の繪に、いやしき人の子産みたる所に飢落したるを書きたり。

【第六十二段】

延政門院、いときなくおはしましける時、院へ参る人に、ことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ、

ゆがみもじとぞ君はおほゆる。

こひしく思ひ参らせ給ふとなり。

【第六十三段】

後七日の阿闍梨、武者を集むるこゝ、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人とて、かくことごとしくなりけり。一年の相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用むること、おだやかならぬ事なり。

【第六十四段】

車の五緒は、必ず人によらず、ほどにつけて、きはむる官位に至りぬれば、乗るものなりとぞ、ある人仰せられし。

【第六十五段】

この頃の冠は、昔よりははるかに高くなりたるなりとぞ、ある人仰せられし。古代の冠桶を持ちたる人は、端をつぎて、今用ひるなり。

【第六十六段】

岡本の關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙を添へて、この枝につけて参らすべきよし、御鷹飼下毛野の武勝に仰せられたるけりに、「花に鳥つくるすべ知り候はず。一枝に二つつくことも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝に、「さらばおのれが思はむやうにつけて参せよ」と仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて参せけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、蕾なると、散りたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、或は六尺、返し刀五分に切る。枝の半に鳥をつく。つくる枝、踏まする枝あり、しどら藤の割ぬにて二所つくべし。藤のさきは、火打羽の長

にくらべて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて参る。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず。雨覆の毛を少しかなぐり散して、二棟の御所の高欄に寄せかく。祿を出さるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、脊の鼻のかくれぬほどの雪には参らず。雨覆ひの毛を散す事は、鷹は弱腰をとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけむ。九月ばかり、梅の造り枝に雉をつけて、「君が爲めにと折る花は、時しもわかぬ」といへること。伊勢物語に見えたり。造り花は、苦しからぬにや。

【第六十七段】

賀茂の岩本、橋本は、業平、實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一年参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼び止めて、尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺え侍る。吉水の和尙、「月をめで花をながめしいにしへの、やさしき人はこゝにあり原」とよみ給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、おのれらよりは、なかなか御存知などもこそ候はめ」といと悲々しくいひたりしこそ、いみじく覺えしか。

今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌よみて、かの二つの社の御前の水にて書きて、手向けられけり。まことにやむごとなき響ありて、人の口になるあ歌多し。作文詩序などいみじく書く人なり。

【第六十八段】

筑紫に某の押領使などいふ様なる者ありけるが、土大根を、よろづにいみじき薬とて朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館の中に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて、圍み攻めけるに、館の中に兵二人出で來て、命を惜まず戦ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議に覺えて、「日頃こゝにものし給ふこも見えぬ人々の戦し給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、年頃たのみて朝な朝なめしつる土大根に候ふ」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かかる徳もあるけるにこそ。

【第六十九段】

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られけるに、豆の殻を焚きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしくわれをば煮て、からきめを見するものかな」といひけり。焚かるゝ豆殻のはらはらと鳴る音は、「わが心よりすることかは焼かるゝはいかばかり堪へ難けれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

【第七十段】

元應の清暑堂の御遊に、立上は失せにし頃、菊亭の大臣牧馬を弾じ給ひけるに、座に著いて、先づ柱をめぐられたりければ、一つ落ちにけり。御懷にそくひをもち給ひたるにてつけられければ、神供の參る程に、よく乾て、こと故なかりけり。いかなる意趣かありけむ、もの見けるきぬかづきの寄りて、放ちて、元のやうに置きたりけるとぞ。

【第七十一段】

名を聞くより、やがて面影は推し量らるゝ心ちするを、見る時はまたかねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこほどにてぞありけむと覺え、人も今見る人の中に、想ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆ

るにや。又いかなる折ぞ、たゞ今人のいふ事も、目に見ゆるものも、わが心の中もかゝる事の、いつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心ちするは、わればかりかく思ふにや。

【第七十二段】

いやしけなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き前栽に石、草木の多き、家の中に子孫の多き、人に逢ひてことばの多き、願文に作善多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは文車の文、塵塚の塵。

【第七十三段】

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くはみなそらごとなり。あるにも過ぎて、人はものをいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、いひたきま、に語りなして、筆にも書き止めぬれば、やがて定りぬ。道々のものゝ上手のいみじき事など、かたくなる人の、その道知らぬは、そとろに神の如くにいへども、道知れる人は、更に信も起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。

かつあらはるゝをも願みず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることゝ聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをよめきていふは、その人のそらごとにはあらず。けにけにしく所々うちおほめき、よく知らぬよしして、さりながらつまづま合せて語るそらごとは、おそろしきことなり。わがため面目あるやうにいはいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。みな人の興するそらごとは、ひとりさもなかりしものと、いはむも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。

とにもかくにも、そらごと多き世なり。たゞ常にある、めづらしからぬことのみ、心に心得たらむ、よろづに違ふべからず。下さまの人の物語は、耳驚くことのみありよき人はあやしきことを語らず。

かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそらごとを、ねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあしらひて、ひとへに信ぜず、又疑ひ嘲けるべからず。

【第七十四段】

蟻の如くに集りて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。いとむところ何事ぞや、生を貪り、利をもとめて、やむ時なし。身を養ひて、何事をか待つ。斯するところ、たゞ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間に止らず。これを待つ間、何の樂かあらむ。まどへるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人はまたこれを悲ぶ。常住ならむこころを思ひて、變化の理を知らねばなり。

【第七十五段】

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。

世に従へば、心の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交れば、詞よその聞きにしたがひて、さながら心にあらず。人にたはぶれ、ものに争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事、定れることなし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。まどひの上に酔へり、酔の中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたるこころ、人みなかくの如し。

未だまことの道を知らずとも、縁をはなれて身を靜にし、事にあづからずして、心をやすくせむこそ、しばらく樂ぶこもいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

【第七十六段】

世のおほえ花やかなるあたりに、なげきも喜びもありて、人多く行きとぶらふなかに、ひじり法師のまじりて、いひ入れ、たゞすみたるこそ、さらすともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなむ。

【第七十七段】

世の中にその頃、人のもてあつかひぐさにいひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内しりて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。ことにかたほとりなるひじり法師などぞ、世の人の上は、わが如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけむと覺ゆるまでぞ、いひちらすめる。

【第七十八段】

今様の事どものめづらしきを、いひ廣めもてなすこそ、又うけられね。世にことふ

りたるまで知らぬ人は、心にくし。今更のなどのある時、こゝもこにいひつけたることぐさ、ものゝ名など、心得たるどち、かたはしいひかはし、目見あはせ、笑ひなどして、心知らぬ人に、心得ず思はすること、世なれず、よからぬ人の必ずあることなり。

【第七十九段】

何ごとも入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたることよて、さのみ知りかほにやはいふ。片田舎より出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しき方もあれど、みづからいみじき思へるけしき、かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬかぎりは、いはぬこそいみじけれ。

【第八十段】

人ごとに、わが身にうとき事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓引くすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管弦を嗜みあへり。されどおろかなる。おのれの道より、なほ人に思ひ侮られぬべし。法師のみにあらず、上達部、殿上人

上さままで、おしなべて武を好む人多かり。百たび戦ひて百たび勝つとも、未だ武男の名を定め難し。その故は、運に乗じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵つき矢きはまりて、遂に敵に降らず、死をやすくして後、はじめて名をあらはすべき道なり。生けらむほどは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

【第八十一段】

屏風、障子などの繪も、文字も、かたくななる筆様して書きたるが見にくきよりも宿の主人のつたなく覺ゆるなり。大方もてる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物をもつべしにもあらず。損ぜざらむためとて、品なく、見にくきさまにしなし、めづらしからむとて、用なき事どもし添へ、わづらはしく好みなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことごとしからず、つひえもなく、物がらのよきがよきなり。

【第八十二段】

うすものゝ表紙は、とく損するがわびしきと、人のいひしに、頼阿が「うすものは上下はづれ、螺鈿の軸は、貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覚えしか。一部とある草紙などの、同じやうにもあらぬを、見にくしといへど弘融僧都が「ものを必ず一具に整へむとするは、拙き者のすることなり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覚えしなり。すべて何もみな、事のとゝのほりたるは、あしきこゝなり。し残したるを、さてうち置きたるはおもしろく、生きのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を残すことなりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の缺けたるこゝのみぞ侍る。

【第八十三段】

竹林院の入道左大臣殿 太政大臣にあがり給はむに、何のとゞこほりかおはせむなれども、「めづらしけなし、一の上にてやみな」とて、出家し給ひにけり 洞院左大臣殿この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかいふ事侍らなり。月満ちて缺け、もの盛にしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、やぶれに近き道なり。

【第八十四段】

法顯三藏の天竺にわたりて、故郷の扇を見ては悲み、病に臥しては、漢の食を願ひ給ひけることを聞きて、「さばかりの人のむけにこそ、心よわきけしきを、人の國にて見え給ひけれ」と、人のいひしに、弘融僧都「優になさけありける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝ覚えしか。

【第八十五段】

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されどおのづから正直の人、などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たまたま賢なる人を見て、これをにくむ。「大きな利を得むが爲に、少しきの利を受けず、偽りかざりて、名を立てむとす」と譏る。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性、移るべからず。偽りて小利をも辭すべからず。かりにも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばむを、賢といふべし。

【第八十六段】

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進して、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、『御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ』といはれけり、いみじき秀句なりけり。

【第八十七段】

下部に酒飲ますることは、必ずべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊となまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時、迎に馬をつかはしたりければ、『遙なる程なり、口つきの男にまづ一度せさせよ』とて酒を出したれば、さし受けさし受け、よ、と飲みぬ。太刀うちはきて、かひがひしければ、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまり具して逢ひたるに、この男立ち向ひて、『日くれにたる山中にあやしきぞ、とまり候へ』といひて、太刀を引き抜きければ、人もみな太刀ぬき、矢はけなどしけるを、具覺坊手をすりて、『うつし心なく酔ひたるものに候ふ。まけて許し給はらむ』

といひければ、各、嘲りて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、『御坊は口惜しき事し給ひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らす。高名仕らむとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること』と怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて山だちありと、のゝしりければ、里人起りて出であへば、『われこそ山だちよ』といひて、走りかゝりつゝ、切り廻りけるを、あまたして手おほせ、うち臥せて縛りけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男どもあまた走らかしたれば、具覺坊は、梶原にによび臥したるを、もとも出でて、かきもて來つ。からき命生きたれど、腰切り損ぜられて、かたはになりけり。

【第八十八段】

あるもの小野道風の書ける、和漢朗詠集とてもちたりけるを、ある人、『御相傳うける事には侍らじなれども、四條大納言選ばれたるものを、道風かゝむこと、時代や違ひ侍らむ、おほつかなくこそ』といひければ、『さ候へばこそ、世にあり難きものには侍りけれ』とて、いよいよ秘藏しけり。

【第八十九段】

「奥山に猫又といふものありて、人を食ふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫又になりて、人なる事はあなるものを」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほりにありけるが聞きて、一人ありかむ身は、心すべきことにこそと、思ひける頃しも、ある所に、夜更くるまで連歌して、たゞ一人歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫又、あやまたず足のもとへ、ふと寄り來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はむとす。氣も心も失せて、防がむとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「助けよや、猫又、よやよや」と叫べば、家々より松どもこもして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇、小箱など、懐に持ちたるも水に入りぬ。稀有にして、助りたるさまにて、はふはふ家に入りけり。飼ひたる犬の暗けれど主を知りて飛びつきたりけるとぞ。

【第九十段】

大納言法印の召し使ひし乙鶴丸、やすら殿といふ者を知りて、常に行き通ひしに、ある時出でて、歸り來たるを、法印、「いづくへ行きつるぞ」といひしかば、「やすら殿

のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿とは、男か法師か」と、また問はれて袖かきあはせて、いかゞ候ふらむ、頭をば見候はず」と答へ申しき、などが頭ばかりの見えざりけむ。

【第九十一段】

赤舌日といふこと、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人これを忌まず。この頃何者のいひ出でて、忌みはじめけるにか。この日あること、末通らずといひて、その日いひたりしこも、したりし事かなはず、得たりし物は失ひ、企てたりし事成らずといふ、おろかなり。吉日を擇びてなしたるわざの、末道らぬを數へて見むも、又ひとしかるべし、その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、もの皆幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に悪をなすに、必ず凶なり。悪日に善を行ふに、必ず吉なりといへり。吉凶は人によりて、日によらず。

【第九十二段】

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢を手挿みて的に向ふ。師のいはく、「初心の人

二つ矢をもつことなけれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。僅に二の矢、師の前にて、一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。この戒め萬事にわたるべし。

道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において、たゞちにすることの甚だ難き。

【第九十三段】

『牛を賣る者あり。買ふ人、明日その價をやりて、牛を取らむといふ。夜の間に牛死にぬ。買はむとする人に利あり、賣らむとする人に損あり』と語る人あり。これを聞きて、かたへなる者のいはく、『牛の主まことに損ありといへども、また大きな利あり。その故は、生あるもの、死の近き事を知らざること、牛既にしかなり。人また同じ、はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり。一日の命、萬金よりも重し。牛の價、鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はむ人、損ありといふべからず』といふに、みな人嘲りて、『その理は牛の主に限るべからず』といふ。

又いはく、『人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まらむや。愚なる人この樂を忘れて、いたづがはしく外の樂を求め、この財をわすれて、あやふく他の財を貪るには、志みつ事なし。生ける間生を樂ますして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生を樂まざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もしまだ生死の相に與らずといはゞまことの理を得たりといふべし』といふに人いよいよ嘲る。

【第九十四段】

常磐井の相國出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬より下りたりけるを、相國後に、北面なにがしは、勅書をもちながら下馬し侍りし者なり。かほどの者、いかでか君につかうまつり候ふべき」と申されければ、北面を放たれにけり。勅書を馬の上ながら、捧けて見せ奉るべし。下るべからずと。

【第九十五段】

『箱のくりかたに、緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ』と、ある有職の

人に尋ね申し侍りしかば「軸につけ、表紙につくること、兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは右につく。手箱には、軸につくるも常のことなり」と仰せられき。

【第九十六段】

めなもみといふ草あり。くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなむ。見知りて置くべし。

【第九十七段】

そのものにつきて、そのものを費して害ふもの、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に盗人あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

【第九十八段】

尊きひじりのいひ置きけることを書きつけて、一言芳談とかや、名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覚えし事ども、

一、しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうはせぬがよきなり。

一、後世を思はむ者は、楳林瓶一つも持つまじきことなり。持經、本尊に至るまでよきものを持つ、よしなき事なり。

一、遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり

一、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能なる人は無能になるべきなり。

一、佛道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世のこと心にかげぬを第一の道とす。

この外もありしことども覚えす。

【第九十九段】

堀川の相國は美男の樂しき人にて、その事となく過差を好み給ひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく造り改めらるべきよし、仰せられけるに、この唐櫃は上古より傳りて、その始を知らず、數百年を経たり。累代の公物、古弊をもつて規模とす。たやすく改め難きよし、故實の諸官等申されければ、この事やみにけり。

【第一百段】

久我の相國は殿上にて水をめしける時、主殿司土器を奉りければ、まがりを參せよとて、まがりしてぞめしける。

【第一百一段】

ある人、任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、立ち返り取るべきにあらず。思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

【第一百二段】

尹の大納言光忠入道、追儼の上卿を勤められけるに、洞院の右大臣殿に次第を申し請けられければ、『又五郎男を師とするより外の才覺候はじ』とぞのたまひける。かの又五郎は、老いたる衛士の、よく公事に馴れたる者にてぞありける。近衛殿著陣し給ひける時、膝元を忘れて、外記を召されければ、火たきて候ひけるが、『まづ膝突を召さるべくや候ふらむ』と、しのびやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

【第一百三段】

大覺寺殿にて近習の人ども、謎々を作りて解かれける所へ、くすし忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、『わが朝の者とも見えぬ忠守かな』と謎々にせられけるを『唐瓶子』と解きて笑ひあはれければ、腹だちてまかでにけり。

【第一百四段】

荒れたる宿の人めなきに、女のはどかる事ある頃にて、つれづれと籠りたるを、ある人とぶらひ給はむとて、夕月夜のおほつかなきほどに、忍びて尋ねおほしたるに、犬のごとく咎むれば、けす女の出でて、『いづくよりぞ』といふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心ほそけなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし、あやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、こなたへといふ人あれば、たてあけ所せけるやり戸よりぞ入り給ひぬ。

内のさまは、いたくすさまじからず。心にくく、火はあなたにほのかなれど、ものゝきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとつかしう住みなしたり。門よくさしてよ、雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人はそこそに』といへば、『今宵ぞやすきい寝べかめる』と、うちさゝめくも忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。

さてこのほどの事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。こしかた行く末かけて、まめやかなる御物語に、このたびは鶏もはなやかなる聲にうちしきれば、明けはなるゝにやと聞き給へど、夜ぶかく急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難き事などいひて、立ち出で給ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる、四月ばかりのあけほの、艶にをかしかりしをおほし出でて、桂の木の大なるが隠るるまで、今も見遣り給ふとぞ。

【第二百五段】

北の屋かけに消え残りたる雪の、いたう氷りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれたる御堂の廊に、なみなみにあらずと見ゆる男、女となけしに尻かけて、物語りするさまこそ、何事にかあらむ、盡すまじけれ。かぶし、かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

【第二百六段】

高野の證空上人、京へ上りけるに、細道にて、馬に乗りたる女の行きあひたりける

が、口引ける男あしく引きてひじりの馬を堀へ落してけり。ひじりいゝ腹あしく答めて、「こは稀有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かく優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の悪行なり」といはれければ、口引きの男、「いかに仰せらるゝやらむ、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほ息まきて、「何といふぞ、非修非學の男」と、あらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひけるけしきにて、馬引きかへして逃げられにけり尊かりけるいさかひなるべし。

【第二百七段】

女のものいひかけたる返事、こりあへずよきほどにする男は、あり難きものぞとて龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男たちの参らるゝごとに、「時鳥や聞き給へる」と問ひて試みられけるに、某の大納言こかや、「數ならぬ身は、え聞き候はず」こ答へられけり。堀川の右大臣殿は、「岩倉にて聞いて候ひしやらむ」と仰せられたりけるを、「これは難なし。數ならぬ身むづかし」など、定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。「浄土寺の前の關白殿はをさなくて、安喜門院のよく教へまるらせ給ひける故に、御ことばなどのよきぞ」と

人の仰せられけるとか。山階左大臣殿は、「あやしの下女の見奉るも、いと恥しく、心づかひせらるゝ」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、引きつくるふ人も侍らじ。

かく人に恥ぢらるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪慾甚しく、ものゝ理を知らず、たゞ迷の方に、心もはやくうつりことばもたくみに、苦しからぬ事をも、問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、またあさましき事まで、問はずがたりにいひ出す。深くたばかりかざれる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その事あとよりあらはるゝをも知らず。すなほならずして、つたなきものは女なり。その心に従ひてよく思はむことは、心うかるべしされば何かは女の恥しからむ。もし賢女あらば、それもものうとくすさまじかりなむたゞまよひをあるじとして、かれに従ふ時、やさしくも、おもしろくも覺ゆべき事なり。

【第百八段】

寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人の爲にいはいはゞ、一錢輕しといへども、これを重ねれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一

錢を惜む心切なり。刹那覺えずといへども、これはこびて止まざれば、命を終ふる期忽に至る。されば道人は、遠く日月を惜むべからず、たゞ今の一念、空しく過ぐる事を惜むべし。もし人來りて、わが命あすは必ず失はるべしと、告げ知らせたらむに、けふの暮るゝ間、何事をかたのみ、何事をかいとなまむ。われらが生けるけふの日、何ぞその時節に異らむ。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇いくばくならぬ中に、無益のことを爲し、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時を移すのみならず、日を消し、月をわたりて、一生を送る、最も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交はりを許さざりき。しばらくもこれなき時は死人に同じ。光陰何の爲めに惜しむとならば内に思慮なく、外に世事なくして、やまむ人はやみ、修せむ人は修せよとなり。

【第百九段】

高名の木のほりといひし男、人を掟て、高き木にのほせて梢を伐らせしに、いと危く見えしほどは、いふ事もなくて、下るゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやま

ちすな、心して下りよ』と、こぼをかけ侍りしを、『かばかりになりては、飛び下るとも下りなむ。いかにかくはいふぞ』と、申し侍りしかば、その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどはおのれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて、必ず仕ることに候ふ』といふ。あやしき下腐なれども、聖人のいましめにならねり。鞠も難き所を蹴出して後やすく思へば、必ず落つると侍るやらむ。

【第一百段】

雙五の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、『勝たむと打つべからず、負けじと打つべきなり。いづれの手か、よく負くべきと案じて、その手をつかはすして、一目なりとも、おそく負くべき手につくべし』といふ。道を知れる教、身を修め、國を保たむ道も、またしかなり。

【第一百一段】

「園碁、雙六好みて、あかしくらす人は四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」と、あるひじりの申しよこと、耳に止まりて、いみじく覺え侍る。

【第一百二段】

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人いひかけてむや。俄の大事をもいひなみ、切になく事もある人は、他のこと聞き入れず人の愁喜をもとはず。訪はずとて、などやと恨むる人もなし。されば年もやうやうたけ、病にもまつはれ、いはむや世をも逃れたらむ人、またこれに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事かさり難からぬ。世俗のもだし難きに從ひて、これを必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心のいとまもなく、一生は雑事の小節にさゝへられて、空しく暮れなむ。日暮れ道遠し、わが生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ。この心を得ざらむ人は、ものぐるひともいへ、うつゝなし、情なしとも思へ、譏るとも苦まじ、譽るとも聞き入れじ。

【第一百三段】

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらむはいかゞはせむことにうち出でて、男女のこと、人の上をもいひたはるゝこそ、にけなく見苦しけれ。大方聞きにくく、見ぐるしきこと、老人の若き人にまじはりて、興あらむものいひるたる、數ならぬ身にて、世のおほえある人を、隔なきまにいひたる、まづしき所に酒宴好み、客人に饗應せむときらめきたる。

【第百十四段】

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸、御牛を迫ひたりければ、あがきの水、前板までさゝとかゝりけるを、爲則御車のしりに候ひけるが、二希有の童かな。かゝる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、「おのれ車やらむこと、さい王丸にまさりてえ知らじ、希有の男なり」とて、御車に頭をうち當てられにけり、この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことづち、一人ははうばら、一人はおとうしとつけられけり。

【第百十五段】

宿河原といふ所にて、ほろほろ多く集りて九品の念佛を申しけるに、外より人り来るほろほろの、「もしこの中に、いろおし坊と申すほろやおはします」と尋ねければ、その中より「いろおしこゝに候ふ。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申し人、東國にていろおしと申すほろに殺されたりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり」と

いふ。いろおし、「ゆゑしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の川原へ参りあはむ。あなかしこわきざしたち、いづ方をも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事の妨に侍るべし」といひ定めて二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死ににけり。ほろほろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世にほろんじ、梵字、漢字などいひけるもの、その始なりけるとかや。世を棄てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て鬭諍をこととす。放逸無慚のありさまなれども、死を軽くして、少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

【第百十六段】

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人は少しも求めず、たゞありのまゝに、やすくつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目なれぬ文字をつかむとする、益なきことなり。何事もめづらしき事を求め、異説を好むは、淺才の人の必ずある事なりとぞ。

【第一百七段】

友とするにわろきもの七つあり。一には位高くやむごとなき人、二には若き人、三には病なく身強き人、四には酒を好む人、五にはたけく勇める人、六にはそらごとする人、七には欲ふかき人。よき友三つあり。一にはものくるゝ人、二にはくすし、三には智恵ある人。

【第一百八段】

鯉こいのあつものくひたる日は、鬢びんそゝけずとなむ。膠にかはにもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。

鯉こいばかりこそ、御前ごぜんにても切らるゝものなれば、やむごとなき魚なり。鳥には雉き、さうなきものなり。雉き、松茸まつたけなどは、御湯殿おゆどのの上にかゝりたるも苦しからず。その外は、心うきことなり。中宮ちゆうぐうの御方おんかたの御湯殿おゆどのの上のくろみ柵だまに、雁かりの見えつるを、北山入道殿御覽きたやまにりだうだんごんらんじて、歸らせ給ひて、やがて御文おんぶんにて、「かやうのもの、さながらその姿すがたにて御柵ごさくにゐて候まをひしこと、見ならはず。さまあしき事なり。はかばかしき人の候まをはぬ故ゆゑにこそ」など申されたりけり。

【第一百九段】

鎌倉かまくらの海に鯉魚こいぎよといふ魚は、かの境にはさうなきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉かまくらの年寄としよりの申し侍りしは、「この魚、おのれら若かりし世までは、はかばかしき人の前まへに出づること侍らざりき。頭かしらは下部しもべも食はず、切りて棄て侍りしものなり」と申しき。かやうのものも、世の末になれば、上かみさままでも入りたつわざにこそ侍れ。

【第二百段】

からの物は藥くすりの外ほかは、なくとも事かくまじ。書ふみどもはこの國に多くひろまりぬれば書きも寫してむ。もろこしぶねのたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所せく渡しもてくる、いとおろかなり。「遠きものを寶たからとせず」こも、また「得がたき寶たからを貴たかます」とも書ふみにも侍るこかや。

【第二百一段】

養やしひ飼かふものには、馬うま、牛うし、つなぎ苦くるしむるこそいたましけれど、なくてかなはぬ者なればいかゞはせむ。犬は守りふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、こゝさらに求め飼かはずともありなむ。

この外の鳥獸、すべて用なきものなり。走る獸は、檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁やむ時なし。その思わが身に當りて忍び難くば、あらむ人これを樂まむや。生を苦めて目を喜ばしむるは桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦めたるにはあらず。およそ「めづらしき鳥、あやしき獸、國に養はず」とこそ、書にも侍るなれ。

【第二百二十二段】

人の才能は、書あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。つぎには手かくこと、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。學問にたよりあらむ爲なり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつこめも、醫にあらざばあるべからず。次に弓射、馬に乗ること、六藝に出せり。必ずこれをうかゞふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。次に細工よろづの用多し。

この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に絲竹に妙なるは、幽玄の

道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むること、やうやく愚なるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるが如し。

【第二百二十三段】

無益の事をなして時を移すを、愚なる人ともひがごとする人ともいふべし。國のため、君の爲に、やむことを得ずしてなすべき事多し。その餘の暇いくばくならず思ふべし。人の身にやむ事を得ずしていとなむ所、第一に食物、第二に著る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三に過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に犯されずして、靜に過すを樂とす。たゞし、人みな病あり。病に犯されぬれば、その憂しのび難し。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四の事もとめ得ざるを貧しとす。この四かけざるを富めりとす。この四の外を求めいとなむを驕とす。四のこと儉約ならば誰の人か足らずとせむ。

【第二百二十四段】

是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞあけくれ念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

【第二百五段】

人におくれて、四十九日の佛事に、あるひじりを請じ侍りしに、説法いみじくて、みな人涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、「いつよりもここに、けふは尊く覺え侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむ上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師の譽めやうやはあるべき。

また、「人に酒すゝむるとて、おのれまづたべて、人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らむとするに似たる事なり。二方に刀つきたるものなれば、もたぐる時、まづわが頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり。おのれまづ酔ひ臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

【第二百六段】

ばくちのまけ極りて、残りなくうち入れむとせむに、あひ手はうつべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなりと、あるもの申しき。

【第二百七段】

あらためて益なきことはあらためぬをよしとするなり。

【第二百八段】

雅房の大納言は、才かしく、よき人にて、大將にもなさばやとおほしける頃、院の近習なる人、「只今あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹にかはむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、悪くおほしめして、日頃の御氣色も違ひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりけるは、思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。そらごとは不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて、悪ませ給ひける君の御心は、いと尊きことなり。

大方生けるものを殺し、いため鬪はしめて、遊び樂まむ人は、畜生殘害のたぐひなり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心をこめてありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をとみなひ、ねたみ怒り、欲多く、身を愛し、命を惜めること、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し。かれに苦みを與へ、命を奪はむこと、いかでかいたましからざらむ。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからむは人倫にあらず。

【第二百二十九段】

顔回は、志、人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦め、ものを虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。

又いとくなき子をすかし、おどし、いひ辱めて、興する事あり。おとなしき人はまことならねば、事にもあらず思へど、をさなき心には、身にしみておそろしく、恥しく、あさましき思、まことに切なるべし。これをなやまして興すること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、悲び、樂むも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふことなほ甚し。

病を受くることも、多くは心より受く。外より來る病は少し。藥を飲みて汗をもこむるには、驗なきことあれども、一旦恥ぢ恐ることあれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

【第二百三十段】

ものに争はず、おのれを任けて人に従ひ、わが身を後にして、人を先にするにはし

かす。

よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのれが藝のまさりたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。われ負けて、人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まむこと、徳に背けり。

むつまじき中にたはぶるも、人をはかり欺きておのれが智のまさりたる事を興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ、興宴より起りて、長き恨を結ぶたぐひ多し。これ皆あらそひを好む失なり。

人に勝らむことを思はば、たゞ學問して、その智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに争ふべからずといふ事を知るべき故なり。大なる職を辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

【第二百三十一段】

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分を知りて及ばざる時は、速にやむを智といふべし。許さざらむは、人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰

へて分を知らざれば病をうく。

【第三百二十二段】

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。元良親王元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽のつくり道まで聞えけるよし李部王の記に待るとかや。

【第三百二十三段】

夜の御殿は東御枕なり。おほかた東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常の事なり。白川院は北首に御寝なりけり。北は忌む事なり。また伊勢は南なり、大神宮の御方を御あとにせさせ給ふ事いかどと、人申しけり。但し大神宮の遙拜はたつみに向はせ給ふ、南にはあらず。

【第三百三十四段】

高倉院の法華堂の三昧僧、某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて、顔をつくづくと見て、わがかたちの見にくく、あさましき事を、あまりに心うく覺えて、鏡さへうとまじき心ちしければ、その後、長く鏡を恐れて、手にだに取らず、更に人

に交ることなし。御堂のつとめばかりにあひて、籠りるたりと聞き侍りしこそ、あり難く覺えしか。

かしこけなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。われを知らずして、外を知るといふ理あるべからず。さればおのれを知るを、ものを知れる人といふべし。

かたち見にくけれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の犯すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の譏を知らず。但しかたちは鏡に見ゆ、年は數へて知る。わが身のこと知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。かたちを改め、齡を若くせよとはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ静に身をやすくせざる。行愚なりと知らば、何ぞこれを思ふこと、これにあらざる。すべて人に愛樂せられずして、衆に交るは恥なり。かたち見にくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座に列り、雪の頭を戴きて、さかりなる人にならび、いはむや及ばざる事を望み、かなはぬ事を憂へ、

來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心に引かれて、みづから身を辱むるなり、貪る事のやまざるは、命を終ふる大事、今こゝに來たれりと、たしかに知らざればなり。

【第三十五段】

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わぬしの問はれむほどの事、何事なりとも答へ申さざらむや」といはれければ、具氏、「いかゞ侍らむ」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかばかしき事は、かたはしも學び知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、おほつかなき事をこそ、問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもこの淺き事は、何事なりとも、あきらめ申さむ」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて争はるべし。負けたらむ人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられたりけるに、具氏、「をさなくより聞き習ひ侍れど、その心知らぬこと侍り。馬のきつりやうきつにのをか、なかくほれいりくれんどう」と申すことは、いかなる心にか侍らむ、承らむ」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそゞろごとなれば、いふに足らず」といはれけるを、「もとより

深き道は知り侍らず。そゞろごとを尋ね奉らむと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるこぞ。

【第三百三十六段】

醫師あつしけ、故法皇の御前に候ひて、供御の参りけるに、「今参り侍る供御のいろを、文字も功能も、尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じ合せられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と、申しける時しも、六條の故内府まるり給ひて、「有房、ついでにももの習ひ侍らむ」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」と、問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど、既にあらはれにけり。今はさばかりに候へ。ゆかしき所なし」と申されけるに、こよみになりて、まかり出でにけり。

【第三百三十七段】

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。吟きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはるこゝありてまからで」なども書けるは

「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふならひは、さるこゝなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし」などはいふめる。

よろづのことも、はじめ終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。あはで止みにしうさを思ひ、あだなるちぎりをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色このむとはいはめ、望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、しらがしなどの濡れたるやうなる葉の上いきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがたと、都こひしう覺ゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人は、ひとへにすけるさまに見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り、立ち寄り、あからめ

もせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごこいと遅し。そのほどは棧敷不用なり」にて、奥なる屋にて酒飲み、もの食ひ、圍碁、雙六など遊びて、棧敷には、人を置きたれば「渡り候ふ」といふ時に、おのおの肝つぶるゝやうに、争ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり出でて、押しあひつゝ、ひとことも見もらさじとまもりて、「とあり、かゝり」と、ものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで」といひて下りぬ。たゞものをのみ見むとするなるべし。

都の人のゆゝしけなるは、ねぶりていとも見ず。若く末々なるは、宮づかへに立ちゐる。人の後に候ふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どもゆかしきを、それか、かれかなと思ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまさまに行きかふ、見るもつれづれならず、暮るゝほどには立てならべつる車ども、所なく並みあつる人も、いづ方へ行きつら

む、ほどなく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゞみも取り拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

かの棧敷の前を、こゝら行きかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ。この人数も、さのみは多からぬにこそ。この人みなうせなむ後、わが身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。

大きな器に水を入れて、細き穴をあけたらむに、したること少しといふとも怠る間なく漏り行かば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐ者、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。けふまで遁れきにけるは、あり難き不思議なり。しばしも世をのどかには思ひなむや。まゝ子だてといふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたるほどは、取られむ事、いづれの石も知らねども、數へあてゝ、一つを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、またまた數ふれば、かれこれまぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍に出

づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へる、いとはかなし。靜なる山の奥、無常の敵きほひ來らざらむや。その死に臨めること、軍の陣にすゝめるに同じ。

【第三百二十八段】

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを皆とらせ侍りしが、色もなく覺へ侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

かくれどもかひなきものはもろ共に、

みすのあふひのかれ葉なりけり。

とよめるも、母屋の御簾の葵のかゝりたる枯葉をよめるよし、家の集に書けり。古き歌のこゝろばがきに、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕草紙にも「こし方戀しきもの、かれたる葵」を書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名残なく、いかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる薬玉も、

九月九日菊にこりかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の中に、菖蒲、藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「折ならぬねをなほぞかけつる」と、辨のめのとのいへる返事に、「あやめの草はありながら」とも、江の侍従がよみしぞかし。

【第三百二十九段】

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし、花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな一重にてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり、いとちたくねぢけたり。植ゑずともありなむ。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白きうす紅梅。ひとへなるがとく咲きたるも、重りたる紅梅のほひめでたきも、みなをかし。おそき梅は櫻に咲きあひておほえ劣り、けおされて、枝にしほみつきたる、心うし。一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極の入道中納言は、なほひこへ梅をなむ、軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳またをかし。四月ばかりのわか楓、すべてよろべの花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘、かつら、いづれも木はものふり、大きなるよし。

草は山吹、藤、かきつばた、なでしこ。池には蓮、秋の草は萩、薄、桔梗、萩、女郎花、ふぢばかま、紫苑、われもかう、薊、りんどう、菊、黄菊も、蔦、葛、朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなるが垣に繁からぬよし。

この外、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。おほかた何もめづらしく、あり難きものは、よからぬ人のもて興するものなり。さやうのものなくてありなむ。

【第四百十段】

身死して財残る事は、智者のせざる所なり。よからぬもの蓄へ置きたるもつたなくよきものは、心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、まして口惜し。『われこそ得め』などいふ者どもありて、徳に争ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらむ中にぞ護るべき。朝夕なくてかなはざらむものこそあらめ、その外は、何ももたでぞあらまほしき。

【第四百十一段】

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、雙なき武者なり。古郷の人の

來りて物語すとて、『あづまびとこそ、いひつることはたのまるれ。都の人はことうけのみよくて、實なし』といひしを、ひじり、『それはさこそおほすらめど、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やひ放たず、心弱くことうけしつ。偽せむとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから、本意通らぬこと多かるべし。あづま人はわが方なれど、けには心にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるゝぞかし』と、ことわられ侍りしこそ、このひじり聲うちゆがみあらしくして、聖教のこまやかなる理、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言の後、心にくゝなりて、多かる中に、寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそとおほえ侍りし。

【第四百十二段】

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷のおそろしけなるが、かたへにあひて、『御子はおはすや』と問ひしに、『一人ももち侍らず』と答へしかば、『さてはものあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いとおそ

ろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ』といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ親の志は思ひ知らるれ。

世を棄てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすはひがことなり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗をもしつべき事なり。されば盗人をいましめ、ひがことをのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は、恒の心なし。人はまりて盗す。世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦め、法を犯さしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。さていかゞして、人を恵むべきならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農をすゝめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひがことせむ人をぞ、まことのぬす人とはいふべき。

【第四百十三段】

人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人の語るを聞くに、たゞ靜にして亂れ

すといはじ、心にくかるべきを、愚なる人は、あやしくことなる相を語りつけ、いひしことばも、ふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

【第四百四十四段】

梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、あしあし」といひければ、上人立ちとまりて、「あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字阿字唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊く見ゆるは」と、尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」こ答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて、感涙をのこはれけるとぞ。

【第四百四十五段】

御隨身秦の重躬、北面の下野の入道信願を、落馬の相ある人なり。よく愼み給へといひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神の如しと、人思へり。さていかなる相ぞと、人の問ひければ、「きはめて桃尻にて、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申しあやまりたる」とぞいひける。

【第四百四十六段】

明雲座主、相者にあひ給ひて、「おのれもし兵仗の難やある」と、尋ね給ひければ、相人、「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と、尋ね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおほしよりて、たづね給ふ。これ既にそのあやぶみのきざしなり」と申しけり。果して矢にあたりて失せ給ひにけり。

【第四百四十七段】

灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふこと、近くの人のいひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

【第四百四十八段】

四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣のことあり。必ず灸すべし。

【第四百十九段】

鹿茸を鼻にあて、鼻ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

【第五百十段】

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、うちうちよく習ひ得て、さし出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固、かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑るゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳だけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものゝ上手さいへども、始は不堪のきこえもあり、むけの瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

【第五百十一段】

ある人のいはく、年五十になるまで、上手に至らざらむ藝をば棄つべきなり。勵み

習ふべき行末もなし。老人のことをば、人もえ笑はず。衆に交りたるも、あいなく見ぐるし。大方よろづのしわざはやめて、いとまあるこそめやすく、あらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯をくらすは下愚の人なり。ゆかしく覺えむことは、學び聞くと、そのおもむきを知りなば、おほつかなからずしてやむべし。もとより望む事なくしてやまむは、第一のことなり。

【第五百十二段】

西大寺の靜然上人、腰かゞまり眉白くまことに徳たけたるありさまにて、内裏へ参られたりけるを、西園寺内大臣殿「あなたふとのけしきや」とて、信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、「年の寄りたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらほひて、毛はけたるを引かせて、「このけしきたふとく見え候ふ」とて、内府へ参らせられたりけるとぞ。

【第五百十三段】

爲兼大納言入道、召し捕られて、武士どもうち圍みて、六波羅へ入て行きければ、資朝卿一條わたりにて、これを見て、「あなうらやまし。世にあらむ思ひ出、かくこ

「そあらまほしけれ」とぞいはれける。

【第五百十四段】

この人、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたはものども集りたるが、手も足もねぢけゆがみ、うちかへりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきくせ者なり。最も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく覺えければ、たゞすなほに、めづらしからぬものにはしかずと思ひて、歸りて後、この間、植木を好みて、ことやうに曲折あるをもとめて、目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、みな掘り棄てられにけり。さもありぬべき事なり。

【第五百十五段】

世に従はむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきこゝは、人の耳にもさかひ、心にも違ひて、その事ならず。さやうの折ふしを心得べきなり。但し病をうけ、子産み、死ぬることのみ、機嫌をはからず、ついであしとて止むことなし。生住異滅

のうつりかはる、まことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滞らずたゞちに行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、必ず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず、さかくの用意なく、足を踏みとどむまじきなり。春くれて後夏になり、夏はてて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつほみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下にまうけたる故に、待ちとるついで甚だはやし。

生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れるついであり、死期はついでを待たず。死は前よりしも來らず、かねて後にせまれり。人みな死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、おほえずして來る。沖の干瀉はるかなれども、磯より潮の満つるが如し。

【第五百十六段】

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治の左大臣殿は東三條殿にて行はる。内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけ

り。させることによせなけれども、女院の御所など借り申す故實なりこそ。

【第二百五十七段】

筆を取ればもの書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤うたむことを思ふ。心は必ず事に觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。

あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾にして多年の非を收むる事もあり。かりに今、この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數をとり、經をとらば、忘る中にも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もしそむかざれば、内證必ず熟す。しひて不信いふべからず。仰ぎてこれを尊ぶべし。

【第二百五十八段】

「盃のそこを棄つることは、いかゞ心得たる」と、ある人の尋ねさせ給ひしに、「擬當に申し侍れば、底に残りたるを棄つるや候ふらむ」と申し侍りしかば、「さにあらず、魚道なり。ながれを残して、口のつきたる所をすゞぐなり」とぞ仰せられし。

【第二百五十九段】

「みなむすびといふは、絲を結び重ねたるが、蟻といふ貝に似たればいふ」と、あるやむごとなき人仰せられき。になといふはあやまりなり。

【第二百六十段】

門に額かくるを「うつ」といふはよからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、「額かくる」とのたまひき。見物の「棧敷うつ」もよからぬにや。「ひらばりうつ」などは、常の事なり。「棧敷かまふる」などいふべし。「護摩たく」といふもわろし、「修する」「ごまする」などいふなり。行法も、法の字をすみていふわろし、にこりていふと、清閑寺の僧正仰せられき。常にいふことに、かゝる事のみ多し。

【第二百六十一段】

花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

【第二百六十二段】

遍照寺の承任法師、池の鳥を日頃かひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸一つをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、たてこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ村の男ども起りて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりてうち伏せ、ねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を首にかけさせて禁獄せられにけり。基俊大納言別當の時になむ侍りける。

【第百六十三段】

太衝の太の字、點うつべからずといふこと、陰陽のともがら、相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛の關白殿にあり、點うちたるを書きたり」と申しき。

【第百六十四段】

世の人あひ逢ふ時、しばらくも黙止することなし。必ずことばあり。そのことを聞くに、多くは無益の談なり。世の浮説、人の是非、自他のために失多く、得少し。これを語る時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。

【第百六十五段】

あづまの人の都の人にまじりはり、都の人のあづまに行きて身を立て、また本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

【第百六十六段】

人間のいとなみあへるわざを見るに、春の日に雪佛を作りて、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔を建てむとするに似たり。そのかまへを待ちて、よく安置してむや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪の如くなる中に、いとなみ待つこと、甚だ多し。

【第百六十七段】

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常の事なれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道のうらやましく覺えば、「あなうらやまし、なか習はざりけむ」といひてありなむ。

わが智を取り出でて人に争ふは、角あるものゝ角をかたづけ、牙あるものゝ牙をか

み出すたぐひなり。人としては善に誇らず、ものと争はざるを徳とす。他にまさる事のあるは、大なる失なり。品の高さにては、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひことばに出てこそいはねども、内心にこそばくのとがあり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、おのづから明にその非を知る故に、志常に満たずして、遂にものに誇るることなし。

【第六十八段】

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には、誰にか問はむ」などいはるゝは、老の方人にて生けるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりと、つたなく見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなむ。大方は知りたりとも、すゞろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞えおのづからあやまりもありぬべし。「さだかにもわかまへ知らず」などいひたるは、なほまことに、道のあるまじとも覺えぬべし。まして知らぬこと、したり顔に、おとなしくも解きぬべくもあらぬ人の、いひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞きぬる、いとわびし。

【第六十九段】

何ごとの式といふことは、後嵯峨の御代まではいはれざりけるを、近き程よりいふことばなりと、人の申し侍りしに、建禮門院の右京の大夫、後鳥羽の院の御位の後、又うちすみしたる事をいふに、「世の式もかはりたる事はなきにも」と書きたり。

【第七十段】

さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむづかし。人と對ひたれば、ことば多く、身もくたびれ、心も静ならず、よろづの事ははりて時をうつす。互のため益なし。いとほしけにいほむもわろし、心づきな事あらむ折は、なかなかその由をいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて「今しばし、けふは心靜に」などいひはむは、この限にばあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、久しく聞えさせねばなばかりいひおこせたる、いとうれし。

【第七十一段】

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下ま

で、目をくぼる間に、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立て、弾くに、向なる石をまもりて弾くはあたらす。わが手もとをよく見て、こゝなるひじり目をすぐに弾けば、立てたる石必ずあたる。

よろづのこと、外に向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清猷公がことばに、『好事を行じて、前程を問ふことなかれ』といへり。世を保たむ道もかくや侍らむ。内を慎まず、軽くほしまゝにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めてはかりごとをもとむ。『風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なり』と、醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、恵をほどこし、道をたゞしくせば、その化、遠く流れむ事を知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも師をかへして徳を布くにはしかざりき。

【第七十二段】

若き時は、血氣内にあまり、心ものに動きて、情慾多し。身をあやぶめて碎けやすきこと、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて資を費し、これを棄て、苔の袂にやつれ、いさめる心さかりにしてものと争ひ、心に恥ぢうらやみ、好むところ日々

に定らず。色に耽り情にめで、行をいさぎよくして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくて、身のまたく久しからむ事をば思はず、すける方に心引きて、長き世がたりともなる。身を過つことは、若き時のしわざなり。

老いぬる人は精神衰へ、あはくおろそかにして、感じ動くところなし。必おのづから静なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人のわづらひなからむことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くしてかたちの老いたるにまされるが如し。

【第七十三段】

小野小町がこと、きはめてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ書に見えたり。その書、清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなること、その後の事にや、なほおほつかなし。

【第七十四段】

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小を捨つ

ることわり、まことにしかなり。
 人事多かる中に、道を樂ぶより氣味深きはなし。これまことの大事なり。一たび道を聞いて、これに志さむ人、いづれのわざかすたれざらむ、何事をかいたなまむ。愚なる人といふとも、賢き人の心に劣らむや。

【第七十五段】

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめて、しひ飲ませたるを興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へがたけに、眉をひそめ、人目をはかりて棄てむとし、逃げむとするを、捉へて引き止めて、すゞろに飲ませつれば、うるはしき人も忽ち狂人となりて、をこがましく、息災なる人も目の前に、大事の病者となりて、前後も知らず仆れ臥す。祝ふべき日などは、あさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、もの食はず、によび臥し、生を隔てたるやうにして、昨日のこゝ覚えす。公私の大事を缺きてわづらひこなる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かくからき目にあひたらむ人、ねたく口惜しと思はざらむや。人の國にかゝる習あるなりと、これらになき人ごとにて、傳へ聞きたらむは、あやしく不思議に覚えぬべし。

人の上にて見るだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく、笑ひのゝしり、ことば多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝけて、用意なき氣色、日頃の人も覺えず。女は額髪晴らかにかきやり、まばゆからず、顔うちさゝけてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出して、おのおの歌ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒くきたなき身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、うとましくにくし。あるは又わが身いみじき事ども、かたはらいたくいひ聞かせ、あるは酔ひ泣きし、下さまの人はのりあひ、いさかひてあさましくおそろし。恥がましく、心うき事のみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、縁より落ち、馬車より落ちてあやまちしつ。ものにも乗らぬきは、大路をよろほひ行きて、築土、門の下などにむきて、えもいはぬ事どもしちらし、年老い、袈裟かける法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつゝよろめきたる、いとかはゆし。

かゝる事をして、この世も後の世も益あるべきわざならば、いかゞはせむ。この世にてはあやまら多く、財を失ひ、病をまうく。百樂の長とはいへど、よろづの

病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにしうさをも思ひ出でて泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ、善根を焼くこと火の如くして、悪をまし、よろづの戒を破りて、地獄に落つべし。酒を取りて、人に飲ませたる人、五百生が間、手なきものに生る」とこそ、佛は説き給ふなれ。

かくうとましと思ふものなれど、おのづから棄て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃出したる、よろづの興を添ふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入り来て、とり行ひたるも心なぐさむ。なれなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだもの御酒などよきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬、狭き所にて、火にてもものいりなどして、隔なきどち、さし向ひて多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、「御肴なに」などといひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、しひられて、少し飲みたるも、いとよし。よき人のとりわきて、「今一つ上少し」など、のたまはせたるもうれし。近づかまほしき人の、上戸にてひしひし三馴れぬる、またうれし。さはいへど上戸はをかし、罪許さるゝものなり。酔ひくたびれて、朝寝したる所を、主人の引きあげたるに、まどひてほれたる顔ながら、細きもとゞりさし出し、

ものも著あへず、いだき持ち、引きしろいて逃ぐる、かいどり姿のうしろで、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつきづきし。

【第七十六段】

黒戸は、小松の御門位に即かせ給ひて、昔たゞ人におはしましゝ時、まさなごとせさせ給ひしを、忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。みかま木にすゝけたれば、黒戸といふとぞ。

【第七十七段】

鎌倉の中書王にて御鞆ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、いかゞせむと沙汰ありけるに、佐々木隠岐の入道、鋸の屑を車に積みて、多く奉りたれば一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。とりためけむ用意あり難しと、人感じあへり。

この事を、ある者の語り出でたりしに、吉田の中納言の「乾砂の用意やはなかりける」とのたまひなりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、いやしくことやうの事なり。庭の儀を奉行する人、乾砂をまうくるは故實なりとぞ。

【第七十八段】

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとて「寶劍をば、その人ぞ持ち給へる」などいふを聞きて、内なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝の御座の御劔にてこそあれ」と、しのびやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

【第七十九段】

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野さいふ所に安置して、ことに首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。そのひじりの申されしは「那蘭陀寺は大門、北向なりと、江帥の説とていひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず。更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけむ、おほつかなし。唐土の西明寺は北向、勿論なり」と申しき。

【第八十段】

さぎちやうは、正月にうちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出して焼きあぐるなり。「法成就の池にこそ」とはやすは、神泉苑の池をいふなり。

【第八十一段】

「降れ降れこ雪、たんばのこ雪」といふこと、米搗き、篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。「たまれこ雪」といふべきを、誤りて「たんばの」とはいふなり。「垣や木のまたに」と歌ふべしと、あるものしり申しき。昔よりいひける事にや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降るに、かく仰せられけるよし、讃岐の典侍が日記に書きたり。

【第八十二段】

四條大納言隆親の卿、からざけといふものを供御に参せられたりけるを、「かくあやしきもの参るやうあらじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言「鮭といふ魚参らぬ事にてあらむにこそあれ。鮭のしらほし、なでふことかあらむ。鮎のしらほしは参らぬかは」と申されけり。

【第八十三段】

人突く牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りて、そのしるしとす。しるしをつけずして、人をやぶらせぬるは、主のとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。こ

れみなどがあり。律のいましめなり。

【第百八十四段】

相模の守時頼の母は、松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切り廻しつゝ張られければ、兄の城の介義景、その日の經營して候ひけるが、賜りて某男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たるものに候ふ」と、申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景「みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見ぐるしくや」と、重ねて申されければ、「尼も後はさわさわと張りかへむと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。ものはやぶれたる所ばかりを修理して、用ひることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむ爲なり」と申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つほどの人の子にてもたれける、まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ。

【第百八十五段】

城の陸奥の守泰盛は雙なき馬乗なりけり。馬を引き出させけるに、足をそろへて、しきみをゆらりと越るを見ては、「これは勇める馬なり」とて、鞍を置きかへさせけり。また足をのべて、しきみに蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて、乗らざりけり。道を知らざらむ人、かばかり恐れなむや。

【第百八十六段】

吉田と申す馬乗の申し侍りしは、「馬ごとにはききものなり。人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をば、まづよく見て、つよき所、弱き所を知るべし。次に鞍の具に、あやふきことやあると見て、心にかゝることあることあらば、その馬を走すべからず。この川意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。これ秘藏のことなり」と申しき。

【第百八十七段】

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざることは、たゆみなくつゝしみて、かるがるしくせぬこゝ、ひとへに自由なるとの、ひとしからぬなり。藝能、所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、おろ

そかにしてつゝしめるは得のものなり。巧にしてほしきままなるは失のもとなり。

【第百八十八段】

あるもの、子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、説經などして世渡るたつきともせよ」といひければ、教のまゝに説經師にならむ爲に、まづ馬に乗り習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒、どすゝむることあらむに、法師のむけに能なきは、檀那すまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やうやう境に入りければ、いよいよよくしたく覺えて、たしなみけるほどに、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべてこのことあり。若きほどは、諸事につけて身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、うち怠りつゝ、まづさし當りたる、目の前の事のみにまぎれて月日を送れば、ことごとくなすことなくして身は老いぬ。遂にもものゝ上手にもならず、思ひしやうに身をももたず、取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうちに、むねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を、案じ定めて、その外は思ひ棄て、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來たらむ中に、少しも益のまさらむ事をいとみて、その外をばうち棄て、大事をいそぐべきなり。いづ方をも棄てじ心にとりもちては、一事も成るべからず。

たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小を捨て、大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨て、十の石につくことはやすし、十を捨て、十一につくことは難し。一つなりともまさらむ方にこそつくべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てず、かれをも取らむと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべきことを思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。こゝまで來つきぬれば、この事をばまづいひてむ。目をさゝぬ事なれば、西山のことは、歸りて又こそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ずなさむと思はゞ、他のことの破るゝをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。萬事にかへずしては一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、ある者「ますほの薄、まさほの薄」などいふことなり。わたなべのひじり、この事を傳へ知りたりと語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに「蓑笠やある、借し給へ。かの薄のこころならひに、わたなべのひじりの尋ねまからむ」といひけるを「あまりにもさわがし。雨やみてこそ」と、人のいひければ「むけの事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨のはれまをも待つものか。われも死に、ひじりも失せなば、尋ね聞きてむや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゆしくあり難う覺ゆれ。「敏き時はすなはち功あり」こそ、論語といふ書にも侍るなる。この薄を、いぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

【第百八十九段】

今日はその事をなさむと思へど、あらぬいそぎまづ出で来て、まぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかたの事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいそ心ぐ

るし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくの如し、一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよものは定め難し。不定と心得ぬるのみ、まことに違はず。

【第百九十段】

妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。いつもひとり住みにてなど聞くこそ心にくけれ。誰がしが聲になりぬとも、又いかなる女をとりすゑて、あひ住むなど聞きつれば、むけに心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひゐたらめと、いやしくも推し量られ、よき女ならば、この男こそらうたくして、あが佛とまもり居たらめ、たとへばさばかりにこそと覺えぬべし。まして家の中を行ひをさめたる女、いと口惜し。子など出でて、かしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて、年よりたるありさま、なきあとまであさまし。いかなる女なりとも、明暮添ひ見むには、いと心づきなく、にくかりなむ。女の爲も中空にこそならめ。よそながら時々かよひ住まむこそ、年月経ても絶えぬなからひとならめ。あからさまに來て、こまり居などせむはめづらしかりぬべし。

【第九十一段】

夜に入りて、ものゝはえなしといふ人、いと口惜し。よろづの物のきらかざり、色ふしも、夜のみにこそめでたけれ。晝はことそぎ、をよすけたる姿にてもありなむ。夜はきらゝかに、花やかなる装束、いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、ものいひたる聲も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。にほひ、ものゝ音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。

さしてことなることなき夜、うちふけて、参れる人の清けなるさましたる、いとよし。若きどち、心とどめて見る人は、時をもわかぬものなれば、ことにうちとけぬべき折ふしぞ、けはれなく引きつくるはまほしき。よき男の日くれてゆするし、女も夜ふくるほどに、すべりつゝ、鏡とりて顔などつくりひ出づるこそをかしけれ。

【第九十二段】

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まるりたる、よし。

【第九十三段】

くらき人の人をはかりて、その智を識れりと思はむ、更に當るべからず。つたなき

人の暮うつことばかりにさとく、たくみなるは、かしこき人のこの藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばすと定めて、よろづの道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、おのれすぐれたりと思はむこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師暗證の禪師、互にはかりて、おのれにしかすと思へる、共に當らず。おのれが境界にあらざるものをば争ふべからず、是非すべからず。

【第九十四段】

達人の人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからず。たとへばある人の、世にそらごとを構へ出して、人をはかる事あらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるる人あり。あまりに深く信を起して、なほわづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。また何としも思はで、心をつけぬ人あり。またいさゝかおほつかなく覺えて、たのむにもあらず、たのますもあらで、案じるたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらむとて、やみぬる人もあり。又さまざまに推し、心得たるよしして、かしこけにうちうなづき、ほほゑみてるたれど、つやつや知らぬ人あり、また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと、手をう

ちて笑ふ人あり。また心得たれども、知れりともいはず、おほつかなからぬは、とかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又、このそらごとの本意を、はじめより心得て、少しも欺かず、かまへ出したる人と、同じ心になりて、力を合する人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得たる所、詞にても、顔にても、かくれなく知られぬべし。まして明ならむ人のまどへるわれらを見むこと、掌の上のものを見むが如し。たゞしかやうのおしはかりにて、佛法までをなすらへいふべきにはあらず。

【第百九十五段】

ある人、久我繩手を通りけるに、小袖に大口著たる人、木作の地藏を、田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心得がたく見るほどに狩衣の男、一三人出て来て、「ここにおはしましたけり」とて、この人を具して去にけり。久我の内大臣殿にてぞおはしける。世の常におはしましたけり時は、神妙にやむごとなき人にておはしけり。

【第百九十六段】

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、この殿大將にて、さきを追はれけるを、土御門の相國、「社頭にて警蹕いかゞ侍るべからむ」と申されければ、「隨身のふるまひは兵仗の家が知ることに候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼、惡神を恐るゝ故に、神社にてはことにさきを追ふ理あり」とぞ仰せられける。

【第百九十七段】

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孀といふこと、延喜式に見えたり。すべて數定りたる公人の通號にこそ。

【第百九十八段】

楊名の介に限らず、楊名の目といふものあり。政事要略にあり。

【第百九十九段】

横川の行宣法師が申し侍りしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なし」と申しき。

【第二百段】

吳竹は葉細く、河竹は葉廣し。御溝に近きは河竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは吳竹なり。

【第二百一段】

退凡下乗の率都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

【第二百二段】

十月を神無月といひて、神事にはどかるべきよしは、記したるものなし。本文も見えず。但し當月、諸社の祭なき故に、この名あるか。この月、よろづの神たち、大神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢にはことに祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し多くは不吉の例なり。

【第二百三段】

勅勘の所に鞆かくる作法 今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に鞆をかけらる。鞍馬に鞆の明神といふも、鞆かけら

れたりける神なり。看督長の負ひたる鞆を、其の家に掛けられぬれば、人出で入らず。このこと絶えて後、今の世には、封をつくる事になりけり。

【第二百四段】

犯人を答にて打つ時は、拷器によせて結ひつくるなり。拷器の様も、よする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

【第二百五段】

比叡山に、大師勸請の起請文といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし。古の聖代、すべて起請文につきて行はるゝ政なきを、近代、このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれを立てず、入物にはけがれあるべし。

【第二百六段】

徳大寺の右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて、使廳の評定行はれけるほどに、官人草筆が牛はなれて、廳の中へ入りて、大理の座のはまゆかの上にのほりて、にれうらかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかにすべ

きよし、おのおの申しけるを、父の相國聞き給ひて、『牛に分別なし。足あれば、いづくへかのほらざらむ。厩弱の官人、たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし』とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をば更へられにけり。あへて凶事なかりけるとなむ。あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみ却りてやぶるといへり。

【第二百七段】

龜山殿建てられむとて、地をひかれけるに、大きな蛇、數も知らずこり集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事よしを申しければ、いかがあるべきに勅問ありけるに、ふるくよりこの地をしめたる者ならば、さうなく掘り捨てられ難し』と、みな人申されけるに、この大臣一人、『王土にをらむ蟲、皇居を建てられむに、何のたゞりをかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからむ。たゞ皆掘り捨つべし』と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたゞりなかりけり。

【第二百八段】

經文などの紐を結ふに、上下よりたすきに違へて、一筋の中より、わなの頭を、横

さまに引き出すことは、常のこゝなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正、解きてなほさせけり。『これはこの頃のやうの事なり、いとにくし。うるはしくは、たゞくるくと巻きて、上より下へわなのさきを挿むべし』と、申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になむ侍りける。

【第二百九段】

人の田を論ずるもの、うたへに負けて、ねたさに、その田を刈りて取れとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、『これは論じ給ふ所にあらず、いかにかくは』といひければ、刈るものども、『その所とても、刈る理なければ、ひがことせむてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ』とぞいひける。理いとをかしかりけり。

【第二百十段】

喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥とも、さだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり。これは鶴なり。萬葉集の長歌に、『霞たつ長き春日の』などつゞけたり。鶴鳥も喚子鳥のことさまにか

よひて聞ゆ。

【第二百十一段】

よろづの事はたのむべからず。愚なる人は深くものをたのむ故に、恨み怒ることあり。勢ありとてたのむべからず、こはきものまづ亡ぶ。財多しとてたのむべからず。時の間に失ひ易し。才ありとてたのむべからず、孔子も時にあはず。徳ありとてたのむべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をもたのむべからず、誅を受くること速なり。奴したがへりとてたのむべからず、背き走ることあり。人の志をもたのむべからず、必ず變ず。約をもたのむべからず、信あること少し。身をも人をもたのまざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。狭き時はひしげくたく。心を用ひること少しきにしてきびしき時はものにさかひ争ひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性何ぞ異らむ。寛大にして極らざる時は、喜怒これにさはらずして、ものゝ爲にわづらはず。

【第二百十二段】

秋の月は、かぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、むげに心うかるべきことなり。

【第二百十三段】

御前の火爐は火をおく時は、火箸して扱むことなし、土器より直にうつすべし。さればころび落ちぬやうに心得て、炭をつむべきなり。八幡の御幸に、供奉の人、淨衣を着て、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人、「白きものを著たる日は火箸を用ゐる、苦しからず」と申されけり。

【第二百十四段】

想夫戀といふ樂は、女、夫を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻訖なり。廻訖國とて夷のこはき國あり。その夷、漢に服して後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

【第二百十五段】

平の宣時朝臣老の後、昔語に、「最明寺入道、ある宵の間に呼ばるゝことありしに、「や

がて』と申しながら、直垂ひたたれのなくて、とかくせしほどに、また使來つかいりて、『直垂などの候らはぬにや、夜なればことやうなりとも疾はやく』とありしかば、なえたる直垂、うちうちのまゝにてまかりたりしに、銚子てうしに土器かたらけとり添へてもて出でて、『この酒を一人たうべむがさうざうしければ申しつるなり。肴さかなこそなけれ、人は静りぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ』とありしかば、紙燭しじゆさしてくまぐまを求めしほどに、臺所だいのの棚に、小土器こたらけに味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ來め得て候ふ』と申ししかば、『こと足りなむ』とて、心よく數獻すけんに及びて、興に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか』と申されき。

【第二百十六段】

最明寺入道、鶴岡つるがきの社參しやまのついでに、足利左馬あしかさまの入道のもとへ、まづ使をつかはして、立ち入られたりけるに、あるじまうけせられたりけるやう、一獻いっけんにうちあはび二獻にけんに鍛か、三獻さんけんにかいもちひにてやみぬ。その座には亭主夫婦、隆辨りやうべん僧正、あるじがたの人にて座せられけり。さて、『年ごとに賜る足利の染物そめもの、心もとなく候ふ』と申されければ、『用意し候ふ』とて、いろいろの染物三十、前にて女房どもに、小袖に調あぜさせて、後につかはされけり。その時見たる人の、近くまで侍りしが語り侍りしなり。

【第二百十七段】

ある大福長者のいはく、『人はよろづをさし置きて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧みしくは生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳につかむと思はゞ、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他のことにあらず、人間常住の思しに住すまして、かりにも無常を觀することなかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願しよくわん無量なり。慾に従ひて志を遂すげむと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむ時なし、財たからは盡くる期きあり。限ある財をもちて、かぎりなき願に従ふこと、得べからず。所願心にきざすことあらば、われを亡なすべき惡念來れりと、堅く慎み恐れて、小用せうようをもなすべからず。次に錢を奴やつの如くしてつかひ用ゐるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如くおそれ尊たふとみて、從へ用ゐることなかれ。次に恥かたじけなくに臨むといふとも、怒り恨むることなかれ。次に正直にして、約を固くすべし。この義を守りて、利を求めむ人は、富の來ること、火の乾けるにつき、水の下れるに隨まふが如くなるべし。錢積せんづりて盡つきざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所かどを飾ら

す、所願を成せざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。そもそも人は所願を成せむが爲に、財をもとむ。錢を財とする事は、願をかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用るざらむは、全く貧者と同じ。何をか樂とせむ。このおきては、たゞ人間の望を斷ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせむよりは、しかじ財なからむには。癩疽を病むもの、水に洗ひて樂とせむよりは、病まざらむには如かじ。こゝに至りては貧富わく所なし。究竟は理即にひとし、大欲は無欲に似たり。

【第二百十八段】

狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて舍人が寢たる足を狐にくはる。仁和寺にて夜、本寺の前を通る下法師に狐三つ飛びかゝりてくひつきければ、刀を抜きてこれを防ぐ間狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ法師はあまた所くはれながら、こと故なかりけり。

【第二百十九段】

四條の黃門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてやむごみなき者なり。先日來りていはく、「短慮のいたり、きはめて荒涼のことなれども、横笛の五つの穴は、聊か

いぶかしき所の侍るかど、ひそかにこれを存す。その故は、千の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調を置きて、夕の穴黃鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に、みな一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたずして、しかも間をくばることひとしき故に、その聲不快なり。さればこの穴を吹く時は、必ずのく、のけあへぬ時はものにあはず。吹き得る人かたし」と申しき。料簡のいたり、まことに興あり。先達、後生を恐るといふこと、この事なり」と侍りき。

他日に景茂が申し侍りしは、「笙はしらべおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛は吹きながら、息の中にて、かつしらべもて行くものなれば、穴ごとに口傳の上に性骨を加へて、心を入るゝこと、五の穴のみに限らず。ひとへにのくこばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴も心よからず、上手はいづれをも吹きあはず。呂律のものにかなはざるは、人のとがなり、器の失にあらず」と申しき。

【第二百二十段】

「何事も、邊土は卑しくかたくななれども、天王寺は舞樂のみ都に恥ぢず」といへ

ば、天王寺の令人の申し侍りしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、もの音のめでたくととのほり侍ること、外よりもすぐれたり。故は太子の御時の圖、今に侍るを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その聲黄鐘調のものなかり。寒暑に従ひてあがりさがりあるべき故に、二月の涅槃會より、聖靈會までの中間を指南とす。祕藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲もとよのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘の聲は黄鐘調なるべし。こな無常の調子、祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまた度鑄かへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋ね出されけり。法金剛院の鐘の聲、黄鐘調なり。

【第二百二十一 段】

「建治、弘安の頃は、祭の日の放免のつけものに、ことやうなる緋の布四五反にて馬をつくりて、尾髪にはとうじみをして、蛛の網書きたる水干につけて、歌の心などいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心ちにてこそ侍りしか」と、老いたる道志どもの、今日も語り侍るなり。この頃はつけもの年を送りて、過差ここの外になりて、よろづの重きものを多くつけて、左右の袖を人持たせてみづからは、鉾をだにもたす息つき苦むありさま、いと見ぐるし。

【第二百二十二 段】

竹谷の乗願房、東一條院へ参られたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利多き」と尋ねさせ給ひければ、「光明眞言寶篋印陀羅尼」と申さりたりけるを、弟子ども「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛にまさること候ふまじとは、など申し給はぬぞ」と申しければ、「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あるべしと説ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせ給はよ、いかば、さむと思ひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

【第二百二十三 段】

鶴のおほいどのは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひける故にと申すは、ひがことなり。

【第二百二十四 段】

陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、尋ねまうで來りしが、まづさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましく、あるべからぬ事なり。道を知るものは植うる

まことをつとむ。細道一つ残して、みな島につくり給へ』といさめ侍りき。まことに少しの地をも、いたづらに置かむ事は、益なきことなり。食ふ物、薬種などを植ゑ置くべし。

【第二百二十五段】

多の久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に、興あるこどもを擇びて、磯の禪師といひける女に教へて舞はせけり。白き水干に鞆巻をさしせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師が女、静といひける、この藝をつけり。これ白拍子の根源なり。佛神の本縁を歌ふ。その後、源の光行多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜へさせ給ひけるとぞ。

【第二百二十六段】

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして學問を棄て、遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝ある者をば、下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門の

事を、ことにゆゝしく書けり。九郎判官の事は、詳しく知りて書き載せたり。蒲の冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くの事どもを記し漏せり。武士のこと、弓馬のわざは、生佛東國の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

【第二百二十七段】

六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文をあつめて作りて、つとめにけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて、聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讃も同じく、善觀房はじめたるなり。

【第二百二十八段】

千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人これをはじめられけり。

【第二百二十九段】

よき細工は、少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたくたゝず。

【第二百三十段】

五條の内裏にはばけものありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども、黒戸にて碁を打ちけるに、御簾をかゝけ見るものあり、「誰そ」と、見向きたれば、狐、人のやうについてゐて、さしのぞきたるを、「あれ狐よ」とよまれて、まどひにけにけり。未練の狐ばけ損じけるにこそ。

【第二百三十一段】

圃そのの別當入道は變さうなき庖丁者はうちやうじやなりけり。ある人のもとにて、いみじき鯉いを出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でむもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、「このほど百日の鯉を切り侍るを、今日けふ缺けつき侍るべきにあらず。まけて申し請けむ」とて切られにける、いみじくつきづきしく興ありて、人ども思へりけると。ある人、北山の太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。一切りぬべき人なくばたべ切らむ」といひたらむは、なほよかりなむ。なんでふ百日の鯉を切らむぞ」このたまひたりし、をかしく覺えしと、人の語り給ひける、いとをかし。
大方おほかたふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたることなり。まれ人の響應なども、ついでをかしきやうに取りなしたるも、まことによけれども、た

ゞその事となくて取り出でたる、いとよし。人にもものを取らせたるも、ついでなくて、これを奉らむといひたる、まことの志なり。惜むよしして、乞はれむと思ひ、勝負のまけわざにことづけなどしたる、むづかし。

【第二百三十二段】

すべて人は、無智無能になるべきものなり。ある人の子の、見ざまなどあしからぬが、父の前にて人ともものいふとて、史書ししよの文を引きたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらすとも覺えしなり。

又ある人のもとにて、琵琶法師の物語を聞かむと、琵琶を召し寄せたるに、柱しらの一つ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある人の中にあしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄へありや」などいふを見れば、爪つめを生おほしたり琵琶など引くにこそ盲法師めくらほしの琵琶、そのさたにも及ばぬことなり。道に心得たるよしにやと、かたはらいたかりき。ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものにとぞ、ある人仰せられし。若き人は少しの事もよく見え、わろく見ゆるなり。

【第二百三十三段】

よろづのとがあらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかず、うやうやしく

詞少からむにはしかじ。男女老少、みなさる人こそよけれども、ここに若く、かたちよき人の、ことうるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとは、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきにて、人をないがしろにするにあり

【第二百三十四段】

人のものを問ひたるに、知らずしもあらず、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかと思ひてや問ふらむ。またまことに知らぬ人も、などかなからむ。うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。

人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、さてもその人の事のおさましなどばかり、いひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おし返し問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすこともあれば、おほつかなからぬやうに告げやりたらむ。あしかるべきことかは。かやうのことはもの馴れぬ人のあることなり。

【第二百三十五段】

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、

道行き人みだりに立ち入り、狐鼻やうのものも、人けにせかれねば、所得がほに入り住み、こだまなどいふ、けしからぬかたちも、あらはるゝものなり。また鏡には、色形なき故に、よろづの影来りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虚空よくものを容る。われらの心に、念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふものなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中にそこばくのごとは、入り來らざらまし。

【第二百三十六段】

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太の某とかやしる所なれば、秋の頃、聖海上人、その外にも人あまた誘ひて、『いざたまへ、出雲をがみにかいもちひめさせむ』とて具しもて行きたるに、各々をがみて、ゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子狛犬をむきてうしろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、『あなめでたや、この獅子の立ちやう、とめづらし。深き故あらむ』と、涙ぐみて、『いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じ咎めずや、むけなり』といへば、各々あやしみて、『まことに他に異りけり。都のつとに語らむ』などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく、もの知りぬべき顔したる神官を呼びて、『この御社の獅子の立て

られやう、定めて習ある事に侍らむ。ちと承らばや』といはれければ、『その事に候ふ。さがなきわらはべどももの仕りける、奇怪に候ふことなり』とて、さし寄りて、据ゑ直して去にければ上人の感涙いたづらになりけり。

【第二百三十七段】

柳筥に据うるものは、縦さま、横さま、ものによるべきにや。巻物などは、縦さまに置きて、木の間より、紙ひねりを通して結びつく。硯も縦さまに置きたる、筆ころばずよし』と三條の右大臣殿仰せられき。勘解由の小路の家の能書の人々は、かりにも縦さまに置かるゝことなし。必ず横さまに据ゑられ侍りき。

【第二百三十八段】

御隨身近友が自讃にて、七個條書きとよめたることあり。みな馬藝、させる事なきことどもなり。そのためしを思ひて、自讃の事、七つあり。

一、人あまたつれて、花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、『今一度、馬を馳するものならば、馬仆れて落つべし。しばし見たまへ』とて、立ち止りたるに、また馬をはす。とどむる所にて、馬を引き仆して、乗る人、泥土の中にくろび入る。そのことばの誤らざることを、人みな感ず。

一、當代、未だ坊におはしましゝころ、萬里の小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の巻をくりひろげ給ひて、『たゞ今御所にて、紫の朱うばふことをにくむ』といふ文を御覽せさせたきことありて御本を御覽せさせたきことありて、御本を御覽すれども、御覽じ出されぬなり。なほよく引き見よと、仰せごにて求むるなり』と、仰せらるゝに、『九の巻のそこそこのほどに侍る』と、申したりしかば、あなうれしとて、もて参らせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常のことなれど、昔の人はいさゝかの事をも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、『袖と袂と一首の中にあしかりなむや』と、定家卿に尋ね仰せられたるに、『秋の野の草のたもとか花すゝき、穂に出てまねく袖と見ゆらむ』と侍れば、何事か候ふべきと、申されたることも、『時に當りて本歌を覺悟す。道の冥加なり、高運なり』など、ことごとしく記しおかれ侍るなり。九條の相國伊通公の款狀にも、ことなることなき題目をも書きのせて自讃せられたり。

一、常在光院のつき鐘の銘は、在兼の卿の草なり。行房の朝臣清書して、鑄型にうつさせむとせしに、奉行の入道、かの草を取り出でて見せ侍りしに、『花の外に夕

を送れば、聲百里に聞ゆ』といふ句あり。『陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか』と申したりしを、『よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり』とて、筆者のもとへいひやりたるに、『あやまり侍りけり。數行と直さるべし』と、返事侍りき。數行もいかなるべきにか。もし數歩の心か、おほつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔順禮のことはべりしに、横川の常行堂のうち、龍花院と書ける古き額あり。『佐理、行成の間疑ありて未だ決せずと申し傳へたり』と、堂僧こころしく申し侍りしを、『行成なれば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず』といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巢にていぶせけなるをよく掃き拭ひて、おのおの見侍りしに、行成位署名年號さだかに見えたりしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、『誰か覺えたまふ』といひしを、所化みな覺えざりしに、局の内より、これこれにやといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、未だはてぬほどに僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもをかへして、求めさするに、『同じさまなる大衆多くてえ求めあはず』といひて、いと久しくて出でたりしを、『あなわ

びし、それ求めておはせよ』といはれしに、かへり入りて、やがて具して出でぬ。

一、二月十五日、月あかき夜うち更けて、千本の寺にまうでて、後より入りて、ひとり顔深くかくして、聽聞し侍りしに、優なる女の、姿、にほひ、人よりことなるが分け入りて、膝にわかれば、にほひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なほる寄りて同じさまなれば、立ちぬ。その後、ある御所さまのふる女房の、そとろごといはれしついでに、『むけに色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなむありし。情なしと恨み奉る人なむある』とのたまひ出じたるに、『更にこそ心得侍らね』と申してやみぬ。かの聽聞の夜、御局の内より、人の御覽じ知りて、候ふ女房を作りたて、出し給ひて、『便よくばことばなどかけむものぞ。そのありさま、参りて申せ、興あらむ』とて、はかり給ひけるとぞ。

【第二百三十九段】

八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿、清明なる故に、月をもてあそぶに良夜とす。

【第二百四十段】

しのぶの浦の、あまのみるめも所せく、くらぶの山も、もる人しけからむに、わりなく通はむ心の色こそ、浅からず、あはれと思ふふしぶしの、忘れ難きことも多からめ。親、兄弟許して、ひたぶるに迎へすゑたらむ、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶる女の、にけなき老法師、あやしのあづま人なりとも、にぎは、しきにつきて、さそふ水あらばなどいふを、中人いづ方も、心にくきさまにいひなして、知られず、知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ。何事をか、うちいづることのはにせむ。年月のつらさをも、分けこしは山なども、あひ語らはむこそ、盡きせぬことのはにてもあらめ。すべてよその人の、とりまかなひたらむ、うたて、心づきなきこと多かるべし。

よき女ならむにつけても、品くだり見にくく、年もたけなむ男は、かくあやしき身のためにあたら身をいたづらになさむやはと、人も心おとりせられ、わが身は向ひるたらむも、影はづかしく覺えなむ。いとこそあいなからめ。

梅の花かうばしき夜のおほろ月にたどすみ、みかきが原の露わけ出でむ有明の空もわが身さまにしのばるべくもなからむ人は、たゞ色このまざらむにはしかじ。

【第二百四十一段】

望月のまどかなることとは、しばらくも住せず。やがて缺けぬ心とどめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまも見えぬにやあらむ。病の重るも、住するひまなくして死期既に近し。されども未だ病急ならず、死に赴かざるほどは、常住平生の念にならひて、生の中に、多くの事を成じて後、しづかに道を修せむと思ふほどに、病をうけて、死門に臨む時、所願一事も成せず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いてこの度もし立なほりて、命を全くせば、夜を日につぎて、このことかのこと、怠らず成じてむと願を起すらめど、やがて重りぬれば、われにもあらず取りみだしてはてぬ。このたぐひのみこそあらめ、この事まづ、人々いそぎ心におくべし。所願成じて後、いとまありて道に向はむとせば、所願つくべからず。如幻の生の中には何事をかなさむ。すべて所願みな妄想なり所願心に来らば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふ時、さはりなく、所作なくして心身長くしづかなり。

【第二百四十二段】

とこしなへに違順につかはるゝことは、ひとへに苦樂のためなり。樂といふは、好み愛することなり。これを求むること、やむ時なし。樂欲するところ一には名なり

名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづの願、この三にはしかず。これ顛倒の相より起りて、そくばくのわづらひあり。求めざらむにはしかじ。

【第二百四十三段】

八になりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらむ」といふ。父がいはく、佛には人がなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として、佛にはなり候ふやらむ」と。父また、「佛の教によりてなるなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまたさきの佛の教によりてなり終ふなり」と。また問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふ時、父、「空より降りけむ。土よりや涌きけむ」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と、もろ人に語りて興じき。

徒然草(終)

大正十三年九月十五日印刷
大正十三年九月二十日發行

(本文) 定價金五拾錢

本文 二冊函入 (送料金四錢)
詳解 (送料金六拾錢)
(送料金拾八錢)

著作者文學士 飯田 豊

發行者 藤谷芳三郎
大阪市西區靱南通貳丁目貳番地

印刷者 井下精一郎
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地

印刷所 井下書籍印刷所
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地



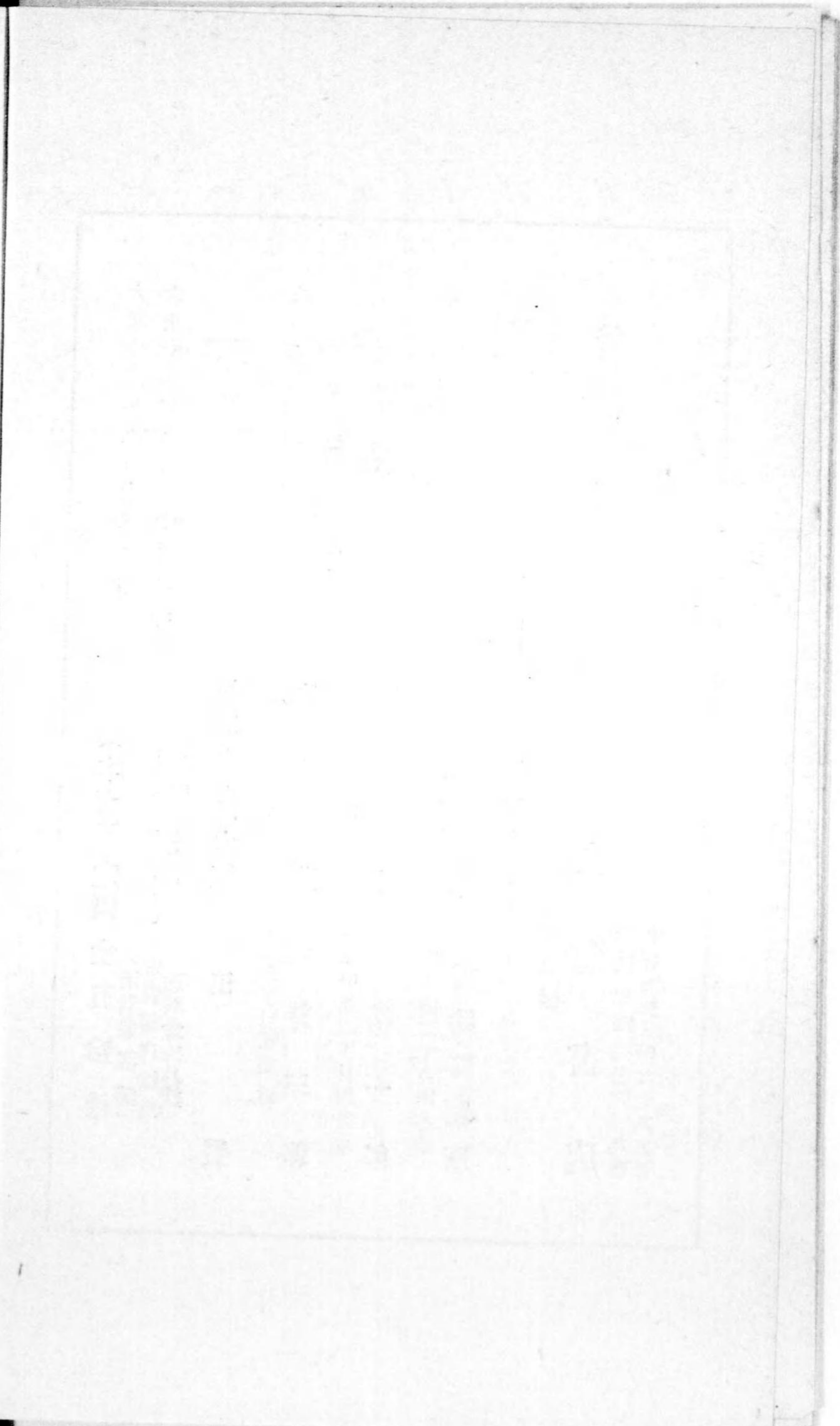
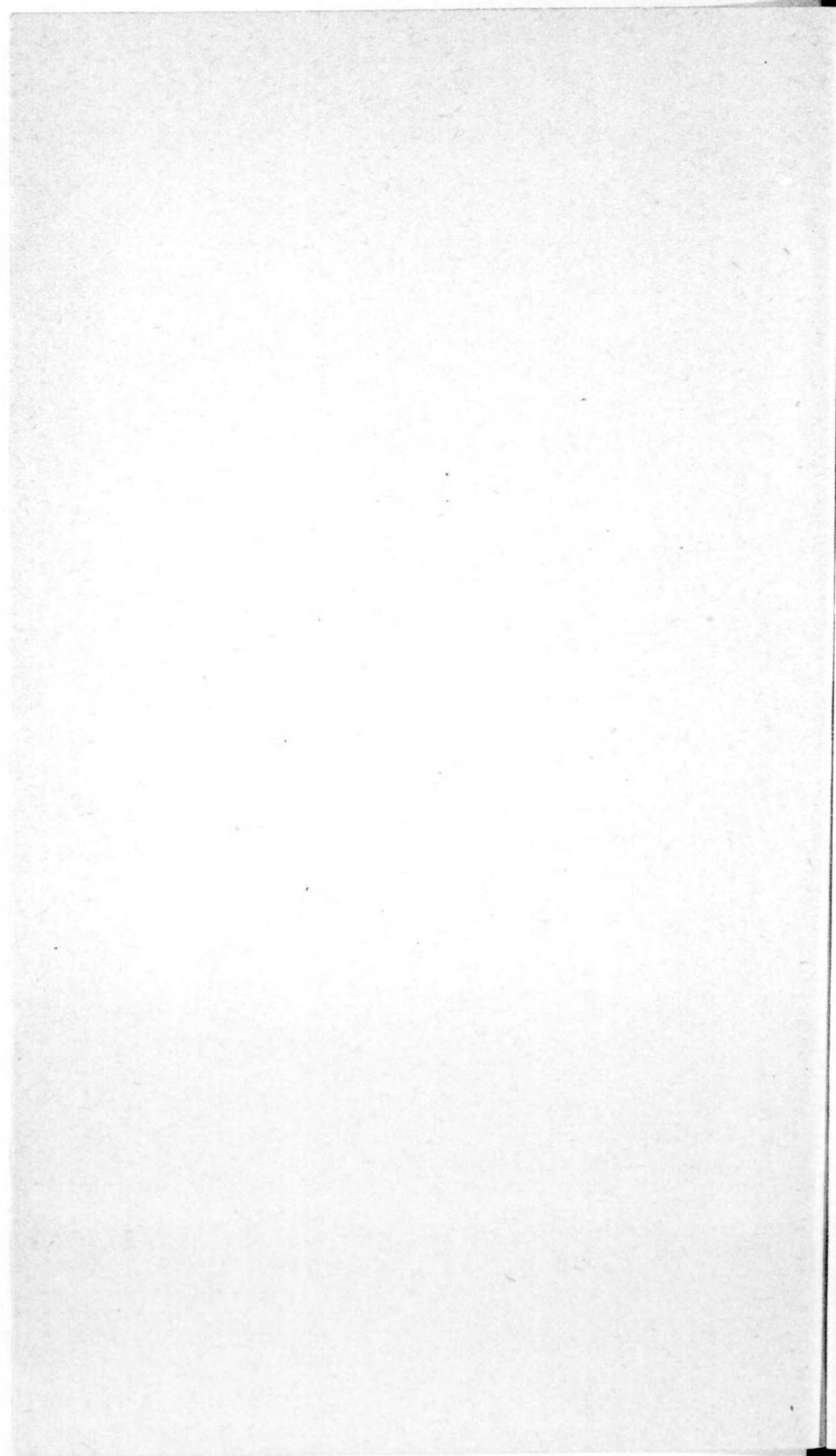
徒然草
(附文本)

發行所

崇文館書店

電話 土佐堀三六一九番
振替口座大阪二七八五番

大阪市西區靱信濃橋交又點西入北側



291
837

終